然るに此評判が追々家中に高くなつて「源藏殿は堅い〳〵と思つてたら何んの事だ此頃の不品行では宜い事をした娘を遣らないで」ホントに那んな人ではあるまいと思つた大酒飲で其上酒癖が悪く何處でも御座れ寢たりするんだものう那んな者を養子に仕たら家の身代は飲み潰されて仕舞う」と之れ迄養子に仕やうの娘を呉れたいのと云つた者は勿論誰一人縁談を申込む者などは無くなつて參つた源藏も此有樣を見て心密かに喜び源藏「先づ之れで漸く蒼蠅い事も無くなつて來たが不思議なもので飲み始めた酒は迚も止められない尤も今更止めたところで仕方が無い志さへ變へなければ宜しいと云ふんで益々酒を呑む從つて酒屋の勘定も溜るやうになりますから此頃では兄伊左衛門に迷惑を懸ける事は度々だ併し骨肉の間柄と云ふものは宜いもので別段伊左衛門は悪い顔もせずに拂つて呉れる併し嫂のおまき殿と云ふのがナカ〳〵矢釜しいといふものは嫁に來た自分には厄介者も居らず夫婦懸向ひで

氷入らずに暮して居つたが今に至つて養子先きから源藏の歸つて來た斗りか隨分我儘放埒をして迷惑を懸けます故實に厭氣になつて居る夫れ故源藏の事と云ふと何を云つても取合はない伊左衛門は源藏の心を知るや知らずや着物を曲げて仕舞へば着せて遣る……小遣が無いと云へば不自由しないやうに與へて遣るが何が仔細のあると云ふ事は悟つて居たものと見える……或日の事で御座います源藏は例の通りグデン〳〵と酔つて仕舞つて家へ歸つて來ましたが己れの部屋として與へられたる四疊半へ這入つてゴロリと其處へ寢轉んだが軈て一睡いたしますと頻りに喝を覺えたと見えて源藏「杉や……杉は居ないか杉「ハイ源藏さま御用で御座いますか」と下女のお杉と云ふのが參りました源藏「杉や氣の毒だが茶碗へ水を一杯持つて來て呉れ」杉「ハイ……」と云つて臺所から水を注いで茶碗を盆へ載せて持つて參りました杉「召上りませ源藏「アヽ其處へ置いて參つて呉れ」と云はれたのでお杉は茶碗をソコへ置

かうとする途端に顚覆かへして仕舞つたが大きな茶腕へ水を一杯入れてまた夫れを顚覆り返した事で御座います故枕許にあつたる大小へ水が懸りました……今迄寢轉んで居た源藏は起き揚るや否や枕許なる大小を取り上げ鯉口を改めて水の懸つたか否やを檢見いたし別段差支もない樣子を見て言語靜かに源藏「以後は氣を注けるが宜いぞよ」杉は兩刀へ水を懸けたから何んなに小言を云はれるかと思つて居たら却つて優しい小言を聞いたので涙を流さん斗りに源藏の志に感じ杉「恐れ入りまして御座います以來は屹度氣を注けますで御座いませう」と云つて己れの部屋へ下りましたが伊左衛門は影にて此樣子を聞いて居たが何か心に默肯いて居つたけれど別段何とも申しませんでした

斯樣な次第にて源藏は一年あまり兄鹽山の家に厄介と相成つて居りましたが愈々討入りの評定も決り元祿十五年極月十四日は吉良家は乘組むので御座

います故今日日の內に夫れ〳〵知己親類のある者は余所ながら暇乞に參りました源藏も今日を別れと思ひます故兄伊左衛門の宅へ參りました……尤も源藏は酒を飲み始てよりは余り家へ寄り付ず四五日留守しては歸つて來し又小遣でも無くなると請求に來る位の物で御座います……依つて此日は既に七八日も留守にいたしました故折しも降りしきる雪を踏立てゝ脇坂家の御門へと差懸りました門番は源藏だと云ふ事は存じては居りますなれど態と困らして遣らうと思つて「門番「誰ぢや默つて通行いたすのは……」源藏も心中に意地の惡い門番だなとは思ひましたけれど源藏「ハイ源藏でございます門番「ムウ源藏殿か併し御門を通行いたすのに破り物の儘通ることは罷り成ませぬぞ」之れは成程尤だと思ひました故取らうと思つたが片手には德利を提げて居るし片手には煮染か何か買つて來たと見えて竹の皮包を提けて居るから双方ソコへ置て笠の紐を解けば宜しいので御座いますけれど面倒なりとや思ひけん

竹の皮包丈ソコへ置いて笠の端へ手を懸けグイッ……と引張つた夫れだものだから臺の處よりメリ〳〵と取れて仕舞ひ 源藏「御免下さい……」と云つて例の通り徳利と竹皮包を提げて鹽山の家へ參りましたが正逆に玄關からも這入れませんから勝手口の方へ廻りますと下女の杉が働いて居りました……

○第二十二席

忠臣酒に溺るが如くして然らず

源藏涙を振つて別れの徳利を殘す

源藏「杉や……源藏さま……能く御歸りで御座いました此雪の降るのに大變で御座いましたでしやう 源藏「何の別に太儀でもないが……時にお兄上は御在であらうな 杉「ハイ……唯今方御出懸けになりました 源藏「何と申す御出懸けになつたと……夫れは殘念然らばお嫂上樣は御在であらうな 杉「ハイ……お

在に御座います」と云つたが平生源藏とおまき殿とは仲が克くない尤も源藏の方では決して彼是は思ふ譯はなかつたのですけれどおまき殿は女心の淺果致にも兎角忌み嫌つて居つた夫れ故お杉も氣轉をきかして 杉「お出でますことはお出で御座いますけれど此雪模樣で御癪氣に御座います 源藏「夫れでは御臥床にでもなつて入らつしやるのか 杉「ハイお臥床になつて居ります……夫れは重れ〳〵殘念至極……杉「デも源藏樣其處に立つて入らつしやらないで揚り遊ばせ……何んですれ其の下げて居るのは……マア厭だ何だと思つたら德利に竹の皮包ですれ……夫れにマア笠がグラ〳〵動くでは御座いませんか 源藏「ウム笠はホンの載つて居る丈だ……ソレ見ろ首を横に振れば此通り落ちて仕舞うはアハ、、、……」と云つて其處へ腰を懸けましたが 源藏「お兄上樣はお留守……お嫂上樣はお癪氣で御臥床であつて見れば實に致し方がない」と暫し思案して居りますとお杉は何だか異體が解らないので唯側に付

いて居る丈だ 源藏「杉や……デはマア昇堂と仕やうかの……杉「夫れがお宜しう御座いませう」と臺所の側に爐がある其側へ參りました 源藏「杉やお兄様は直きお歸りの御様子か 杉「左様で御座いますれい今日は御殿へ雪見の會とかで御出でになりました故直にお歸りと申す譯にはなりますまい 源藏「夫れは何にしても殘念だが……最う少し待つて見やう……」と杉を相手に四方山の咄しをいたしながら待つて居る 源藏「杉やまだお兄上様はお歸りが無いかのう 杉「未だ御歸りにはなりません 源藏「夫れは困つたのう……最う之れソロ〳〵日暮にもなるだらうし……然らば杉や誠に濟まぬがお兄上様の御平常召しがあるだらう何うか夫れを一襲拜借して參つて呉れ 杉「ハイ……」と云つてつは奥へ參り 杉「奥様へ……まき「何んだへ杉……源藏さんがお歸りのやうだれ 杉「左様で御座います……可笑では御座いませんか 竹皮包と德利を持つて來てお兄上様は御在かとお尋れでしたから御留守だと申上げま

したらお嫂上様はと御尋れ故……何んと申上げて宜しいか知れませんが兎も角も御病氣で御臥床になつて居ると申上げましたら……デはお兄上様の御平常召しを拜借したいと申すことで御座いますまき「爾うかい夫れは宜かつた 妾は誠にお目に懸るのは迷惑だから杉や夫れでは其處の箪笥に旦那様のお平常召が這入つて居るから持つて往つて上げてお呉れ」と伊左衛門の平常着を杉に渡しました源藏は杉より兄伊左衛門の平常着を受取りまして夫れをば衣絞竹へ釣し鴨居の折釘へ懸けました杉は默つて之れを見て居ますと軈ての事に其前に端座して 源藏「お兄上様永々御迷惑を相懸け御厄介に相成りましたが別段御恩送りもいたさず何共源藏相濟ぬ次第に御座います此度は遠くの國へ御召抱へになりましたに就ては是非御目に懸つて之れ迄永らく御迷惑をかけたお詫をいたしたく存じ今日御伺ひ申せば生憎御不在如何にも殘念の通り……就ては名殘りの酒を汲まんため一升求めて參りましたお肴も御座います……

……サア一ツ何うぞ召上つて下さいお酌をいたしませう」と云ひ乍ら茶呑茶碗へ持つて參つた酒を注ぎました 源藏「兄上何うぞ召上つて下さい……イヤ御返盃で御座いますか之れは何とも恐縮千萬チツトツト溢れます……」キユーツと呑んで 源藏「兄上最う一ツお過し下され源藏御酌いたしませう」と一人で差しつ抑へつ伊左衞門の鸚鵡石を遣つては御返盃だとかお酌を仕樣とか云つて居る傍に見て居たお杉は餘り狂人染みて居るので可笑くて堪らない……クスリと笑ひ出しましたから最う隱す譯には往かない故アハヽ笑ひ出しました杉「マア源藏さま何をなさるんで御座いますれエ五六日お見えにならない内に大層御樣子は御立派におなり遊ばしたが……チホヽヽ狐にでも化されたような眞似をなすつて……」源藏は何んと云つたつて攜や仕ない暫らくは兄上の御平常召しに對して酒を汲んで居られましたが軈て茶碗を側に置き 源藏「杉や何が可笑くて笑つて居るのだ……馬鹿な狐などに化されやせんぞよ 杉「左樣

で御座いますか夫れなれば宜しう御座いますが心配いたして居りましたよ 源藏「アハヽヽ、夫れでも心配して吳れる丈頼母しいのう何でも宜いやお兄上樣と御名殘りの酒盛り濟んだから此度は獨酌でお余りを頂戴いたさう」と又も獨で杉を呷し對手に飲み始めました 杉「源藏さま爾うお酒ばかり召上りますと却つてお身體に障りますよお酒の中毒と云つて恐いものだと云ふ事を承つて居ります 源藏「左樣か酒の中毒……成程夫んな事もあるかも知れぬな……併しまだ〳〵明日までは大事な命だ酒の中毒で死んだり致して堪るものか、死にはせんぞよ杉安心いたして居れ「杉ヲホヽ明日まで大事なお命だなんて……延喜でも無い誰だつて貴郎一年も余計に永生きを仕たいと云ふのが人情でありますものう……夫れに御近所の方にも爾う仰しやつてお出で御座いますに源藏さまはお酒さへ召上らなければ豪い方であるのに惜しいものだつて……何も存じません 私でさへ惜しいと思ひますものう少しお控え遊ばしたら

宜しう御座いませう　源藏「フムウ近所でそんなことを申して居るか夫れが何より面白いのだ夫れでこそ大願成就アハ、、、……ケレども杉や今度去る御大名へお抱へになつたるも酒が強いと云ふ事で殿のお相手になるのだ酒の呑めるのも一ツは功能があるではないか　杉「チヤ左樣で御座いますか夫れは〳〵お目出度う存じます　源藏「夫れ故今日兄上の許へお暇乞に參つたのにお目に懸れないとは殘念至極……　杉「今晩は御歸りになりますで御座いませうマア御緩りなさいましな　源藏「處が緩り出來ないので俄かに國表へ御歸りになるに就き直ぐお供を仰せ付られたような譯……併し最うお兄上に御歸りになりそうなものだのう　杉「未だ〳〵御歸りにはなりますまい　源藏「其れは殘念……

……杉「デは爾う早急の御出發ては暫らくは江戸詰にお成り遊ばす譯にはなりますまいで御座いませう　源藏「イヤ〳〵爾う暫らく歸らん樣なことは無い來年は來るよ……屹度參るよ……新盆でな、何うか其の時は冷麵麥と燒酎で

も手向て呉れ　杉「延喜でもない、源藏さま事んな事を仰しやつて……鶴龜々々源藏は杉を相手にいたし心待に兄伊左衛門の歸宅いたすのを待つて居りましたがナカ〳〵お歸りはなかつたので御座います

杉は源藏の樣子を見るところが何うも平素と違つて居るので不思議に思つて居ると源藏も杉に不審などを打たれてはと思ひました故　源藏「杉やお前は今年幾歳に相成つたのう　杉「ハイ廿歳になりました、源藏「爾うか……ウム二十歳か

杉「左樣に御座います」源藏はシゲ〳〵杉の顏を見て居らつしやいましたが源藏「廿歳と云へば女も嫁入りをいたさなければならぬ時だ、感心に其方は當鹽山家へ參つてより影日向なく能く働らいて呉れたので兄も大層喜んで居る何うか嫁入の時は及ばず乍らも相當の支度でもいたして遣りたいと申して居つたぞ

杉「有難う存じます誠に屆きませんで旦那樣、奥樣のお世話樣にばかり成りまする　源藏「併し杉や緣あつて孰れへ嫁入りいたしたにせよ必ず亭主と喧嘩など

いたしてはならんぞよ兎角喧嘩の起りば我儘から起るものだから云ひたい事や胸に治めにくい事があつても昵と我慢して怒つた紛れに物言ひなどいたしては成らんのう、何んでも嫁入りした先きは我家であるから家を治める事を専一に心懸け舅姑を大切に亭主を大事に女の道を守る之れが一番肝心な事だ此の心懸けが無いと遂には離縁沙汰になるやうな譯でお互に詰らぬ咄し……殊に女は一旦離別になつては何うも疵物と云はれるやうな悲しい譯になるから能く何事も勘辨して控え目にいたすが宜いのう」と源藏幾ら酒を呑んだからと申して心から酔つて居る次第ではありません故至つて眞面目になつた、杉も眞身の咄しを聞いては如何にも御尤と思ひますから膝へ手を突いて聞いて居る源藏「アハヽヽ杉、酔ばらいの源藏が此樣事を面眞目腐つて云つて可笑な譯……マアヽ余り遲くなつて折角お召抱べの奉公口を縮尻りでも仕ては取つて返しが付かない……デは杉や此瓶に未だ少し酒が殘つて居るけれど之れはお兄上樣に

上げて吳れ切望吳れヽもお目に懸らんで殘念であつたと申上げて吳れよ、お姉樣にも御大事になさるやう……杉其方も達者に暮せ」と云つて立揚りました杉も何となく名殘りの惜まれ目には一杯涙を浮めて居る杉「源藏さま今に旦那樣もお歸りになりませうものう最う暫らくお待遊ばせ 源藏「イヤヽヽ何時まで居ても際限はない」と心强くも辜所口から立出ましたが之れが今生の見納めかと思へばソゾろに胸は張り裂くばかり二足ばかり歩行いて立どまり五足あるいては後ろを振向く流石の勇士も張り詰めし氣の弛るまんばかりで御座いましたが斯樣に弱い精神では同盟の者に對しても恥かしき譯と又も心を勵まして脇坂の邸を跡にし其夜義士一同と共に吉良の邸へ討入ました、夫れに引換へ此方は鹽山伊左衛門此日は殿の御前にて雪見の宴を催ほされましたが夕景に及んで我家へ立歸る 伊左「常平太儀であつた」おまき殿はじめ下女の杉も玄關に出迎へて一同「お歸り遊ばせ……まき「定めて此雪では御難儀でムい

ましたらう」伊左衛門は其儘奥へお這りになりまして着物を御召換へに相成りお茶を召上つて居りますと まき「那の今日源藏さまがお出になりましたそうで御座います 伊左「ウム源藏が參つたか……夫れは〳〵定めし又見苦しい姿をいたし金子でも無心に參つた事だろう如何いたして呉れた まき「否別段御なる御樣子もありませんでしたが私しは少々癪氣で御目に懸りませんけれど是非貴郎に御目は懸りたいと仰しやつてご御座いました」伊左衛門は平生妻の源藏に對する擧動は知つて居るから別に逢はんからと申して深くも咎めませんけれど心中には產ぬ中と云ふ物は情ないものだと云ふ思召しは充分ありました

伊左「左樣か、デは金子などの無心も申さぬであつたな まき「左樣に御座いますが詳しい事は杉が能く存じて居ります一寸呼んで見ませう」伊左衛門は……斯う云はれて益々腹が立つたけれど开んな事は顏へも出さずに居る杉は次の間へ手を束へ 杉「お召に御座いますか まき「杉や先刻源藏さまが御出になづたが

私はツイお目にも懸らなかつたけれど何んとかお咄しでもあつたかい 杉「ハイ是非旦那樣に御目に懸りたいと仰しやいまして暫らく臺所で御待ちになりましたけれど御歸りが無いものですから大層落膽なさいまして御歸りになりました何處か或る御大名へお召抱へになつたと云ふ事で御扮裝も御立派に大小なども大層御立派なのをお帶になつて御出で御座いました夫れに延喜でもない事を仰しやつて來月は新盆に當るから屹度參るか其時には冷麵麥と燒酎を澤山御馳走して呉れろ抔と御冗談斗り仰しやつて御持ちになつたお酒を召上り夫れに旦那樣のお召物を鴨居へ釣しまして御名殘のお盃をいたし私しにも御相手をしろと仰しやつて、いろ〳〵身の上の爲になる事をお咄し下されました……

……私は今日ばかりは源藏さまが染々お豪い方と思ひまして御座います旦那樣の前ですがお酒さへ召上らなかつたら那い、ふ宜い御方は餘り御座いますまいと私しは存じて居ります」と眞に感心いたしたる如く杉は咄しました伊左衛門も

之れを聞いて猶更逢ひたく思ふにつけおまき殿の不貞意を恨めしく思つたが開んな事を云ひ出しては又面倒だと思つたから其夜は早く御臥みに相成りましたケレども何となく其夜は寢苦しう御座います……怖い夢を見たり呻されたり……ウトウトと夜の明るまでマンヂリとも致さない夫れも其筈で御座います骨肉の弟が今宵は命を抛つて刄の中に出入いたし居るのでありますものう何んでチチ〳〵寢られる物で御座いませう其の夜は白々と明けましたが曉方に及んでトロ〳〵と眠つたと見えてハヤお目醒めになつた頃には日が高いスルと往來は頻りにがや〳〵いたして窓下を通るものは吉良家へ赤穂の浪士が討入に迫んだと云ふ咄しだ……ハツと胸に答へたる伊左衛門は直に寢所から飛起きて顏をお洗ひになり手を鳴して常平を一間へ召し伊左「常平大總表がやがや〳〵賑やかだのう一體何うしたんだらうお前は樣子を知つて居るか 常平「へイ存じて居ります……昨晩淺野樣の御家來が吉良の邸へ切込みまして唯今高輪泉岳

寺へ引揚げの處で御座います 伊左「左樣か、デは誠に氣の毒だが常平一寸見て參つて呉れ殊によると弟源藏も其仲間の一人かも知れんから」常平は呆れたやうな顏をして 常平「夫れは住つて參りますことは參りますが大概無駄で御座いませう……」常平は正直ものだから迚も那のノンダクレが義士の中に居るやうな事はあるまいと思つて左樣申しました、ケレども伊左衛門は何と申されても據どころが無いが萬一仲間の内に居らなかつたら御自分も恥であります故伊左「左樣さなア、必ず居ろとも居ないとも限らないが一寸御苦勞乍ら見て來て呉れと此日斗りは主が手を下げて賴むやうな次第……常平は迚も無駄骨とは思つたが主命で御座いますから急いで人込みの中を押分け大通りへ出ます と遥か向ふから列を正して義士一同引揚げて參ります 常平「何うかマア宜い鹽梅に御居で下されば宜いが旦那樣だつて那んなに御心配なすつて居らつしやるものう……ソラ來た〳〵……」と往來は全然人の山を築かん斗りなれど人

込を押分けて漸く眞先きへ進み第一列の通り過ぎるのを二人〳〵に見ましたが、源藏の影も姿も見えない常平「チヤ〳〵一番目には居なかつたが……ソラ三番目が來た何うか此の内にはお出で〻下されば宜いが……又駄目だ一番目にも二番目にもお出ではないと……今度は三番目だ、チヤ〳〵之れで最早お終ひだが此中に居なかつたら大變だ……何うぞ金比羅樣源藏さまは此中に御出で下さいますやうに……」常平も心中金比羅さまを拜んで居るナカ〳〵主思ひで御座いさす、スルと一人〳〵に目を皿のやうにして見て居ると最後に源藏は昨日に變る勇ましき姿と相成り威風凛然手疵一ツ負はずに引揚げて參りました常平「ヤア源藏さま……チエ、有難い克く〻マア御無事で御出で下さいました之れと申すも金比羅さまの御利生……旦那樣も定めし御喜びで御座いませう」源藏も殊によつたら誰か見物人の内に居やしまいかと思つて居りました處へ源藏さまと大きな聲で言はれたからヒヨツと見ると常平だ 源藏「常平か

能く參つて居つた……昨日は御兄上樣の許へ御暇乞に往つたがトウ〳〵御目に懸ることも出來ず實に殘念であつた併し喜んで吳れ此通り手疵一ツ受けず主君のお恨も晴したやうな譯……アヽ待て〳〵常平之れは些少ながら金子である其方と杉に遣はす故分けろが宜らう……夫れに此れなる呼子の笛に短册之れは御兄上へ遺品として差上る……夫れから此印籠の中の藥は萬病にも効顯のあるけれど別けて氣を晴すには實に妙藥だお姉上樣は常々御弱くて入らつしやるし殊に昨日伺つた節は御癪氣で御休みの御容子であつたから之れを差上げて吳れるやうに……吳々も御兄上樣に宜しく申して吳れよ常平其方も達者に暮せ列を放れては永く咄も出來ん名殘は盡きぬ」と云ひさま駈出しました常平はいろ〳〵お遺命の品を戴きましたが禮を云ふ事も忘れて仕舞ひ常平「源藏さま最う一目逢はして下されまし……源藏さま……」と泣き聲を揚げて呼んで居る、ケレども跡を追懸けろ譯にも參らず殊に名殘は盡きぬ故

常平は再び氣を勵まし宙を飛んで伊左衛門方へ立歸り門口からして大きな聲

常平「旦那樣源藏さまは今引揚げの最中で確かに居りまして御座います」と怒鳴つたから長屋中殘らず知れ渡る、伊左衛門は常平の歸りが手間取れるやうな氣がして待つて居る處でしたが今此聲を聞付けて玄關へ御立出でになり

伊左「常平か大儀であつた源藏は居つたらうな 常平「恐れ入りました仰の通り夫れは〳〵勇ましい扮裝をして御出で御座いました……御覽下さいまし此樣に御遺品を項戴いたして參りました 伊左「ソコデ爾う取廣げても仕方がない……マア〳〵上へ揚つたが宜らう」と之れから常平は足を洗つて奥の間へ參り一伍一什の物語りをいたし色々遺品に就て源藏の申した通りに申上ろとお姉上の御病氣を案じ申し此妙藥を差上ると云はれたんで流石のおまき殿も源藏の志に感じ「平生ノンダクレと斗り思つて居たが扨は爾ういふ次第であつたかと深く恥入りました其内に家中の者孰れも源藏が義士の列に居つたと云ふん

で喜こびに參る……伊左衛門も茲に及んで始めて鼻が高い處が此事大守脇坂侯のお耳に達し早速伊左衛門をお召しになつて有りし容子をお尋れになり脇坂侯「殊に承れば源藏の殘して參つた德利と並に酒が相殘つて居るさうだが夫れを此方に讓つて貰らいたいものだ伊左衛門も未だ何分かの酒が殘つて居ると云ふ事は御存じですから早速邸から夫れを取寄せ貧乏德利の儘献上いたしました處殿にも大層御歎になり早速御酒を召上ると殿「伊左衛門之れは大層好い酒だが流石源藏は侍だ同じ飲むにも下等の酒は飲まんから」飛んだ處で御賞美になりましたが之れより此貧乏德利は永く脇坂家の寶物と相成り桐の箱を指して之を納めて置いたさうですが後ち箱の蓋へ蜀山人が狂歌を認めました

德利の口から夫れと云はれども
昔思へば涙こぼるゝ

實に源藏の忠義と蜀山人の狂歌とは相まつて後世に傳へられまして御座います

○第二十三席

義烈群を抜く源吾兩國橋に煤竹を賣る
功成りて引揚の際其角別を惜む

仇でも討たうと云ふ忠勇無双なる方々であつて見れば定めし鬼をも挫がん斗りの面魂ならんと云はるゝであらうが決して爾うではない神崎與五郎の如き優男もあれば之れから言上いたさんとする大高源吾の如き風流人もある源吾は俳諧を好んで雅號を子葉と申しました一體此當時と云ふものは非常に俳諧が盛んで御座いまして芭蕉、其角、嵐雪、など實に蕉門に於ても名人が大勢居つた其中で芭蕉樣は先生ですから別として續いては其角次が嵐雪で御座います其角、嵐雪と云つて芭蕉の左右の腕と賴まれし程の人物去れば

兩の手に桃と櫻や草の餅

と云ふ句を咏んで芭蕉も人にほこつた程で御座います此方々と相並んで俳名を轟かしたる子葉先生……シテ見れば實に武勇と共に俳名をも轟かしたのは全く子葉が俳諧の德て御座いませう……涙人して後は餘り俳席へも顏を出しませんが其角とは別懇と見えて度々往來して居る處が冬の始め頃より源吾はバツサリ其角の處へ參りません其角先生心配して其角「何うしたか子葉さんは少許も見えないが寒さに向つて感冒でも引はしまいか……ナカ〳〵丈夫さうな人だけれど……」と案じ居る然るに元祿十五年師走の十三日其角に於ては用事があつて兩國橋へ差懸りましたスルト橋の袂に笹竹を賣つて居る者があつた……俳諧師なら云ふものは何事も句の材料と思ひますからヒヨツと其笹竹賣を見ますと煤染めたやうな手拭に面を色んでは居りますれど見覺のある大高子葉だ其角ヤア「子葉先生ではないか暫らくお目に懸らんかつた子葉」存外無沙汰をいたしが此節は此通りの始末で……實は笹竹屋に

化けました何れ其内伺ひませう」其角は子葉の樣子を見て如何にも氣の毒に思つた其角「道理で近頃は來ないと思つたら那いふ樣子だから來ないのだろう……が俳諧師であつて見れば貴賤貧富は眼中に置ないけれど何分が氣の引ける者と見ゐる」とソコは又俗中の事も嚙みこなして居る酸いも甘いも承知いたし居る其角先生だから取敢ず懷中紙を取出し矢立の筆を執つて

年の瀬や水の流れと人の身は

と認めて出しました子葉は之れを手に取るや其角の持つた居つた矢立の筆を借り

あした待たるゝ其の寶船

と附けて出しました、元來源吾が兩國橋の袂に置て笹竹賣りとなり其角に逢つた時と云ふものは明日は吉良邸へ討入る故少しでも手がかりを搜さんと扨こそ姿を換へて吉良家の近所を徘徊し樣子を窺つて丁度此時其歸り

路で休んで居つたので御座います處へ其角が通り懸つたけれど子葉の源吾が義黨の面々と亡君の志をつぎ仇を窺つて居るとは心付きません夫れ故全く貧困に陷り夫れが爲めに此樣商賣をいたして居るのかと思ひましたから夫れで立句を出して脇を附けさせたので御座います尤も立句の意と云ふものは「時よ時節とは云へ斯くまで零落いたすや」と云ふので御座いましたが子葉先生も其位の意は充分曉つて居るケレども人は何と思ふとも夫れで宜しい明日は必ず晴々しき働きをいたし亡君の御無念を散ずる時節到來いたす事と自然其意が脇付けの句に籠つて居りますれど幾ら其角とて夫れ迄は汲み取れなかつた併し男氣の其角の事故着て居つたる黑縮緬の羽織を脱いで其角「子葉先生失禮ながら之れは野老の志進呈いたすで御座いませう源吾「夫れは千萬忝ない……」と云ひいまボロ〳〵の印絆天の上へ突然引懸けた源吾「其角先生能く肖合いましたかな」其角も之れには呆れて仕舞つた幾らな

んでも直ぐに汚ない着物の上へ引懸けるので御座いますから……其角「何んと云ふ構はない奴だろう那の羽織と云ふのは若かも松坂町の松浦壹岐守ト賀公から拝領したんだぜ有難いとでも云つて呉れりやア宜いのに能く似合ひましたもでは困るな」と心中では思ひましたが別段夫れを咎める譯でもない。其内に源吾は貰つた羽織を引懸けた儘、源吾「デは之で御別れ申す……」と云ひさま笹竹を擔いでドン〳〵駈け出して往つて仕舞う其角も己れの艸庵へ戻つて參ります、スルと其角の妻君は出る時に着せかけて遣つた着物が歸る時には着て居ないから 妻「貴郎何うなすたんですれお羽織は……其角「那れか那れは途中で子葉さんに逢つたが如何にもミソボラシイ姿をして居たから呉れて遣つた別段欲しいやうでもなかつたが妻「マア困りますれソンナな呑氣なことを仰しやつて……那れは貴郎松浦さまから頂戴いたして大切なお羽織ぢや御座いませんか 其角「爾うさ夫れを承和で遣つたんだ 妻「承知で遣ると云ふも

のが御座いますか……斯んな事をなすつて貴郎にも似合ひませんれい俳諧師なんてものは下情に通じなくては宜けないと云ふのにホントに之れが上手な手から水が洩つたんでしやう 其角「ナゼ可笑なことをお前いふれい……ナゼ上手な手から水が洩るんだ其角も女房に少しへコまされかゝつたから躍起となつて問ひ詰めました

妻君は其角がムキになつたので笑ひ出した 妻「ナヤ夫れが貴郎お分りになりませんですか……夫れでは申上げましやう萬一那のお羽織を子葉さんが暮れの困ろしのぎに賣拂うとか又は質屋へでも曲げましたとき後日受け出せないで流れとなり古着屋の店へでも釣された時には夫れこそ松浦様の御恥辱……貴郎も御出入をして居て見れば何んなお叱りを蒙るか知れますまい其處が御合點になりませんか」其角も之れには一本遣つけられました 其角「成程之れはソコ迄考へが及ばなかつた……大きに飛んだことをして今更後悔しても詮な

きこと〳〵云つて諦めても唯濟まんのは松浦の御隱居にだ之れから直ぐに往つて申譯をいたして參らう」と其角は取るものも取敢ず松坂町二丁目の松浦候の許へ遣つて參りました首尾よく御目通りも出來まして　松浦「明日は百韻を催す積りの案内いたして於いたが嵐雪も參られるような　其角「左樣に御座いまず確かに參る約束になつて居りまする　松浦「文臺は是非其方に賴まんではならぬ故今日から泊つて居るが宜い別に差支は無いだらう　其角「有難き仕合せに存じます……實は今日御伺申上ましたも余の儀では御座いません何んとも申上げられませぬ事をいたし早速御詫に參殿いたしました　松浦「ウム……夫れは又何ういふ譯歟　其角「明らさまに申上げませんければなりませんが今日兩國橋に於て俳友大高子葉と申す、之れは御隱居樣にも兼て御存じにて候はん赤穂の浪士で御座いますが淺野家滅亡以來風流に思ひを凝らし至つて別懇の間柄でありますれば屢々往來致して居る内此頃薩張り參りませんにより野

老も案じて居る處が不圖今日出逢ひました姿を見るところ如何にも零落いたしまして筐賣りになつて居るやうな次第余り不憐に存ずる處から兼て頂戴いたし置きましたるお羽織を何の氣なしに吳れて遣りましたが誠に相濟ぬ事をいたしお詫に伺ひまして御座います　松浦「別に惠んで遣る分には差支はないではないか　其角「夫れが其余り宜しく御座いませんので　松浦「ハテナ……デハ曲るとでも云ふ事があると往んと云ふのでか　其角「恐入りまして御座います全く苦しい余りに曲るやうな次第があつて夫れが流れに相成り古着店へでも出ました節御紋所を曝しては何とも其角申譯のない次第平に御容赦を願上げたてまつります　松浦「左樣かクレども濟んだ事は是非が無い何も左樣なことを咎め立てをいたしはせんぞ　其角「有難き仕合せに存じます　松浦「併し赤穂の浪士で子葉と申すは予も俳名は存じて居る彼れは立派な侍と心得たが如何なものぢやな　其角「淺野家御盛んの頃にはナカ〳〵歴とした侍と存じま

したけれど今となつては笹賣りの其日暮し實に不憐なものと心得ます、松浦「フム夫れは可笑しな次第予の胸には落ちん 其角「尤も兩國橋にて出會いたし斯樣なる附句をいたしました」と云つて差出したる鼻紙の端 松浦「面白いな其角……あした待たるゝ其寶船……ア、武は盛んなものぢや 侍の心は俳諧師には分らんな」其角は驚きました、侍の心は俳諧師には分らんと云はれたので流石の其角も頻りに考へ出した 其角「あした待るゝ其寶船 松浦「ソコで爾う唄つたところで分るものでは無い……迚も侍の心は俳諧師には分りはせんぞ 其角「扨は殘念なることもあるものかな今日蕉門十哲の筆頭に數へらるゝ身をもつて此位の句が分らんやうでは相成らぬ師匠の手前も面目ない」と思ひましたから日頃活達な其角たが急に鬱き込んで仕舞つた松浦の御隱居は御笑ひ遊ばして 松浦「モー止せ〳〵今日は幾日と心得る極月十三日ではないか……ナ其角あした待たるゝ其寶船ア、武は盛んなものぢやな」

其角は之れでも分らない據どころ無い殘念とは存じましたが其日は其儘にして其角「何れ明日は百韻の御席へ伺ひます故今日は御暇を申上げまする 松浦「左樣か泊つて居つても別に差支はないが……其角「ハイ有難う存じますれと今日は御暇を頂戴いたします……あしたまたるゝ其寶船 松浦「爾う口癖に申しても侍の心は分んぞよ」其角はあしたまたるゝ其寶船を繰返して申すと御隱居さまは侍の心は分らんと申される、其角も如何にも其解釋の付かん内は殘念で御座いますゆゑ〳〵に草庵へ歸つて直ぐ寐て仕舞つた夫れが爲め妻君は心配して 妻「貴郎何う遊ばしました今日松浦の御隱居樣に御叱りでも頂きましたので御座いますか 其角「あした待たるゝ其寶船……侍の心は俳諧師には分らんと申された 妻「夫れでは御羽織の事は何とも御咎めも御座いませんのですか 其角「イヤ〳〵あした待たるゝ其寶船……妻「夫れは貴郎附句では御座いませんか夫んなことは何うでも御羽織の事

で御伺ひに參つて其叱りを蒙つては女房の身として私しも心配で御座います其角「ナンノ侍の心は俳諧師には分らん」其角の妻も呆れて仕舞つた

妻「何んといふ可笑な人だろう急に之れは氣狂ひにでもなつたのか知らん」と内々心配して居る明ればいよ〳〵極月十四日此日は早天より雪が降りまして風流をもてあそぶものには此上もなき景色で御座います其角も一晩寢てあしたは待たるゝ其寶船を考へたけれど何うも分りません今朝は起きても顏の色が惡い好きな酒さへ飲まぬ譯故妻「貴郎今朝は大分御氣分が惡さうに御見受け申しますが御藥でも差上げませうか」其角は默つて火鉢の側に座つて居ります

妻「御酒でも燗けませうか」何んと云つても挨拶をいたしません

余り重言云ひまして小言でも云はれると思ひました故其儘に仕て居る、處へ嵐雪杉風の兩人が參りまして「嵐、杉「サア其角さん往かうじやないか今日は松浦の御隱居から兼々御通知のあつた百韻の日だぜ斯うして雪は降るし俳席

には以つてこいと云ふ雅致があるでは無いか……何を盆槍して居るんだなア支度でも仕ないかなと勸めましたが返事もなんにも仕ないで其角「あしたは待たるゝ其寶船……侍の心は俳諧師には分らない嵐雪何を云ふんだい侍の心は俳諧師に分らないものか野老だつて以前は武士だ其角「夫れが第一間違つて居る……と云つたとき不圖思ひ當つた十四日と云ふ日取り……

……アハ分つた〳〵……あした待たるゝ其寶船ウム大きに爾うだ兎角凝つては思案に能はずだサア出懸けよう……マア待て〳〵待つて吳れ未だ今朝は御酒が濟ない何だつて鼻が氣が利かないから仕樣が無い」妻君は側でクス〳〵笑つて居る妻「聞いて下さい嵐雪さん昨日松浦のお屋敷から歸つて來ますと「あした待たるゝ其寶船」ばかり口癖に云つて居りまして何と云つても返事もいたしません今朝もチヤシと御酒を燗ける斗りにして聞いて見ましても默言て居ります、し余り重言申せば小言を云はれますので控へて居つたので御座いま

すよ」と之から燒海苔か何かで一杯出しました其角「アゝ之れで心持が宜くなつたドレ出懸けやう御待遠さま」プーイと三人出て往つて仕舞つた妻君は昨晩からの夫の擧動は異體が分りませんでしたけれど漸く機嫌を直して出懸けたのを見て初めて安心いたしました、此方は其角、嵐雪、杉風の三人は松浦侯の御屋敷へ參り庭の雪景色など眺めながら百韻の會も初まりました處夕景に滿尾となり夫れから御酒宴となりました嵐雪杉風は嵐〻杉「何うだい其角さん歸らうぢやないか其角「オヤ今夜は御隱居樣に願つて宿泊て頂だく筈だ一足先きへ歸つて貰ひたい嵐〻杉「爾うか爾う云ふ譯ならお先きへ失禮いたさう」と嵐雪杉風の兩人は立歸りました其角は充分御酒の御馳走になり御屋敷へ泊めて頂きましたが奥の座敷へ寢たら宜らうと云ふ處斷つて表長屋の汚ない處へ床を伸べて貰つた其内に夜は追々更けて參ります遙かに聞ゆる陣太鼓の音……之れは豫て御案内の通り極月十四日の晩で大石内藏之助はじ

め四十七士の面々が吉良邸へ討入りの時でありました……其角は「あした待ろゝ其寶船の解釋が分りました故其角「扨はいよ〳〵赤穂の浪人は亡君の御無念を繼ぎ討入り致すと相見える」と夜の明方まで床の上へ座つて遙かに聞える打太刀の音矢叫びの聲を覗つて居る其内に靜まつて仕舞ひますと頻りに門を叩くものがあるゝ之れは吉良邸と松清侯の御屋敷は直き近所でありますから故義士の面々手分けに及んで夫れ〳〵近所へ挨拶に參つたのだ〳〵「唯今赤穂の浪士大石内藏之助を始め四十七人亡君の志を繼ぎ吉良家へ推參し首尾よく本懷を遂げて候一應其旨御通知に及ぶ斯く申すものは義士の一人大高源吾同村松三太夫なり」と聞いたら待ち設けたる其角は突然長屋の窓を押開き其角「子葉先生首尾よく御本懷を遂げられ大慶に存ずる

我雪と思へば輕し傘の上

と大聲に吟じました子葉先生は之を聞いて源吾「扨は其角先生に御座つたかと

忙しき中にも忽ち一句を口吟み

日の恩や忽ち碎く厚氷

其角「イヤ流石は子葉先生なり御美事感服いたす」此時源吾は 源吾「然らば之れにて御暇致さん隨分御無事に……」と云ひ捨てゝ走り去りましたが之れは源吾の子葉が其角との風交上雅事の一席で御座います

○第二十四席

菅谷半之丞苦心して効なく

内匠頭半之丞の忠士を思ふて密に放つエ、引續き言上いたしますは菅谷半之丞が忠孝兩全の美談で御座います半之丞は元來養子の身分で父は半兵衛と申しましたが養母は早く世を去りましたので半兵衛は後妻を迎へることにいたしますと幸ひ去る人が周旋いたし呉れたので早速迎へることにいたしました……處が半之丞は至つて美男子で御小姓に召出されても殿のお覺へも目出度あつたデ二十歳頃に至つては實に

女にしても斯ろ美人はあるまいと思ふ程でございました然るに後妻と云ふのは養父半兵衛とは大層年も違つて全然親娘のやうでありますので兎角家内も圓く治まらぬやうな次第でありましたが怪しからん事には養母のおとよと云ふものが有らうことか有まじき事か養子半之丞に深く懸想いたしまして或日の事密書を認め半之丞の袖へ入れました半之丞も變だとは思つたけれど半之丞「大方之れは母上から何か御用を仰せ付けられたのだらう」と思ひました故開いて見る……御用にしては妙なことが書いてある者だと段々讀んで見ますと思ひの丈を搔口説いてある……若しや人違ひでゝもありは仕まいかと思つて奥書を見れば自分の名當で御座いますから半之丞は驚いたと言はんか呆れたと云はんか暫し呆然として居りましたが半之丞「斯んなことをいたすやうでは實に末が案じられるけれど明白さまに父上に此趣きを咄せば必ず御立腹になつて離縁沙汰になるは知れたこと夫れでは却つて世間へ悪評を曝すやうなもの

で父上の恥辱ばかりか菅谷家一族の恥辱である」と流石少年ながらも利發なもので御座いますに依り頻りに心中如何いたして宜しからんと苦心いたして居りますが扨ナカ〳〵旨い工夫がない、其内に繼母の方からは頻りに玉章を忍ばせますので半之丞は進退谷まつて仕舞つた半之丞「何うも之れと云ふ旨い考へもなし……寧その事之れから身を放埒に持崩したら母上も定めし愛想を盡して思ひ切ると云ふやうな次第に相成るだろう夫れが宜い成可く上手に遊んで借金などは餘計拵らへないやうに……」と之れから御城下なる御茶屋へ登つて酒肴を取寄せ餘り嗜みません酒たが之れも兩親の爲めだと思ひますので酌に來た女中達に冗戯の一ツも言つてからかつて見る、ナニシテモ半之丞は男振りが宜しう御座いますので俗に云ふ女惚れのする天性だ ○「ネエ一寸半之丞さまは役者みたいよ夫れに何となく厭味のない何處かお武家さまだから凛々しい處があつてホントに那の方の處へ往く人は仕合せだワ ○「眞當ネ……大

力今夜あたりも御出になるだらうから此度は皆んなで戯貴て遣うワ、ネエお藤さん……〈「お藤さんは駄目だワ内心半之丞様に思召があるものだから厭にハニカンで居て丸ッ切り外のお客の愛想を云ふのとは違つてワブだわ、れへお藤さん藤「澤山何とでも仰しやいよ此れでも半之丞様は宜いと云んだものう ×「オヤ御馳走さま何か奢つて頂戴な是非奢つて貰はなければ埋らないからさ」なんと云ふ譯で女中達が寄ると觸ると半之丞の噂ばかりだ斯とは知らず案の如く其の晩に飲みに遣つて來た 〈「お藤さん半之丞さまがお出でになりましたよ往つてお酌をしてお上げなさいよ 藤「那んなこと斗り云つて拙女は何んな浮名を立てられても宜いけれど夫れでは那の方に御氣の毒ですワ最う〈其樣事は云はないで下さい」半之丞も余り女中衆に持てまして四人も五人も側に座つて附て居られるんで實に蒼蠅くなつて來た全く何も女に迷つて酒を飲みに來るんでは無い繼母の無體な戀慕を避けんが爲めで御座いますに依り

女中達が大噪ぎやつても左して感じない之れは尤な咄で自分の好かない女に幾らチヤホヤされたつて決して其女が氣に入る者ではない私し共も斯ういふ經驗は澤山ありますが全くの事を申上ろ……所謂普通の人情を申上ろのでお座います半之丞もホト〳〵女中達の蒼蠅い計りでなく中には密かに文を寄せて情をほのめかす者もある半「アヽ蒼蠅い〳〵一方逃れりやヤ又一方此樣譯になつて來る何んと云ふ女と云ふ者は蒼蠅いものだらう」と獨り思案に余つて居る、全く半之丞は前世に女の敵でゝもあつたのでムいませうか之より再び法を換へなほさうと思ひましたので半「迚も酒を飲む位ひでは駄目だから寧そ友人の處へ宿泊て貰うと云ふ事にしたいものだケレども若しも何故宿泊るんだ家があるんだもの歸つたら宜らうと云はれたときに答辯を考へて置かなければ直ぐ挨拶に差支へる……何んと云つたら宜しからう」と又も一思案で御座います半之丞「アヽ仕方がない其時には斯う云はう此節少し發ひ過ぎたん

で兩親の手前面目なく夫れ故家へ歸ることも出來なく期んな始末だと咄さう」と充分考へが出來ました故酒の方も宜い加減に切り揚げ家へ歸り翌ろ日からは友達に咄しをして止めて貰う事になりましたが繼母は一端自分の口から若かも我子に向つて女の嗜みたる情を咄して見れば之は如何にも恥かしい譯殊に歴とした夫もあり萬一之れが夫の耳へでも這入つたことなら如何なる目に逢はんも知れず」と女心の一筋は可愛さ余つて惡さが百倍となり繼母「覺えて居ろ半之丞奴人情を知らない奴は仕方のない者だ之れ程思ひの丈を口説くのに七堅い那の言ひ振り我子とは云ひ乍ら腹を痛めた子と云ふものでは無し夫れに年だつて見醜ひ程違つて居る譯ではなし夫れを恥かしい辱をかゝしたり何かして、エヽ口惜しい〳〵」と今度は反對に夫半兵衛に向つて繼子半之丞が事を讒言を構へます　とよ「ネエ貴郎何うも此頃のやうに半之丞は不身持では困ります夜泊りをいたしたり酒は飲みますし夫れに何うやら人の噂には外に宜いお

馴染が出來たさうで御座います何うも城内の者が料理屋の女に冗戯ちらすやうでは如何にも末の案じられます事で」と甘く持ちかけました半兵衛は開んなことゝは知りません故大に立腹いたし半兵衛「夫は以つての外の事だ開んな者を家へ置いた時には菅谷家の名義に係はるやうな譯だ早速親類の者と相談いたし表沙汰として離縁することに致さう」と頻りに兩親は相談いたして居る半之丞は其んな事とは夢にも知らず相變らず勤めを大事に相勤めて居られました……然るに或夜内匠頭殿は半之丞を側近く御招ぎになり内匠「半之丞半之丞「ハ、ア何御用に御座いますか内匠「イヤ別儀では無いが之れを見よ」と云つて何か御書付を下し置かれました何事なるかと半之丞は手に取つて見ると已れの罪悪を數へたる十八ヶ條の書付けだ……半之丞もウッと思ひました、ナニシテも已れの身に覺えのある事で御座います故半之丞「恐れ入りまして御座います」と差俯向きて默言て居ります内匠「半之丞其方は確に覺

えがあるかな半之丞「ハイ覺えの御座いますことで……」正逆に繼母が某に戀慕いたし夫れが爲めに身持放埒にいたすので御座いますとも云はれません實に心苦しい次第……内匠頭さまは何れより斯る次第を御承知になりました事が内匠「半之丞……何事も予が存じて居るぞよ夫れ故今宵竊かに其方を招いた次第だ……何も其方が心から身持放埒にいたしたる譯でもない父の名を出さず母の汚名を世間に知らせまいとの考へであらうが……夫れが反對に此樣な次第に相成り遠からず表沙汰にならなくてはならぬ事になつて見れば此れ迄其方の苦心いたしたるのも水の泡だ夫れ故予は兩全の策を取つて其方にも傷が付かず又父半兵衛の名も汚さずいたすやう取計はんと存ずるが夫れにしても其方が居つては困るに依つて殘念ながら欠落をいたすが宜い予も其方を手放すのは如何にも殘念だゲレども時と場合で是非ない譯左樣いたすが宜い……若年なる其方に斯んな心配をさせると云ふも可愛想な次第だが決して

短氣を出さず身を全くいたして居るが宜い孰れ歸參いたすやうに予が取斗つて遣はすぞ」と厚きお言葉を頂きましたので半之丞は唯伏し拜む斗り半之丞「之れと云いも殿樣の御高恩……父よりして斯く表沙汰にいたす可き十八ケ條の罪惡までを認められて見れば潔よく自殺いたさん覺悟で御座いますれど折角御憐愍なし下さるものを自儘に切腹いたすは上へ對して恐れおほいことと謹んで御受けに及びました此時內匠頭に於かせられましては御差料の刀一振と金子五十兩を御取出しに相成り內匠「此脇差は予が秘藏いたす品なれどはなむけとして其方に送るのだ必ず遠國にありとも予と思ふが宜しい……夫れに此金子は浪人いたし早速糊口に窮するやうでは第一其方も困るであらうし又二ツには淺野家の浪人ださうだが糊口に窮するとは氣の毒な次第だと人の口の端に懸るも殘念なこと先づ當座の世過ぎにいたすが宜い」と仰せられて御差出しになりました半之丞は何と御禮を申上げて宜しい事やら暫らく涙に暮れて

居りましたが漸くにして顏を揚げ半之丞「折角御恩の賜物謹んで頂戴仕ります何卒百年の御壽命目出度く渡らせられますやうに」內匠頭も之れ迄若年に肖合はぬ半之丞の忠勤なるを御存じて御座いますず故別れとなれば何となくお名殘の惜まれますが內匠「左樣なら其方も壯康に暮せよ」と仰せられ半之丞は其夜暗にまぎれて赤穂を跡にし江戸表を指して參りました、ケレども二君に仕へる抔と云ふ精神は御座いませんにより孰れにかして殿の御恩にそむかぬ樣にいたさんと之れから江戸表は芝邊に浪宅を構へまして手習の指南をいたして居ります……此半之丞と云ふ人は若いに肖合はず誠に器用な人で手も書けば歌なども上手で御座います夫れだものですから夫れが一得でナカ〳〵手習ひ子供も參ります……未だ獨身の事である故少しく不自由で御座いますけれど其の位の事は何とも思つては居ない半之丞「ナニ十八ケ條の申開きも立たず死んだと思へば何んでもない殊には殿の御恩惠にて御佩刀並に金子まで頂戴い

たし斯く安々と世を遂られる事であれば……アヽ之れを思ふと此半之丞身に餘つた御高恩を何時報じて宜しいやら何うか歸參でも叶つた上は粉骨碎身をして殿の御爲に盡さなくてはならぬ」と半之丞は涙に咽ぶことも御座いました其内に追々近所の者にも懇意になりますと、×「菅谷さんお獨りでは萬事御不都合でありませうから氣立の宜い優しい女を一人御世話いたさうでは御座いませんか」半之丞「有難う御座います……御深切は忝なう存じますけれど少々心願の儀あつて婦人は絶ちました」×「アハヽの若い身空で开んな馬鹿〳〵しい事があるものですか是非お貰ひなさい私が御世話いたしませう……明日一人連れて來て御覽に入れませう」氣の早い人もあつたもので獨り合點して翌日奇麗な娘を連れて參りました半之丞は之れには當惑して「何うも之れは實に恐れ入りました、マア善く勘考いたした上御挨拶を申上げませう」×「开んな事を仰しやらないで此子だつて可愛想じや御座いませんか折角斯う

して參つたものう……マア何もか、も私が呑込んで居ますよお嬰どん代りに御遣ひなすつて下さい年は十八ですが幼女で困ります名ですがおきんと云つて溫雅い氣立の宜い事は近所でも評判娘で……ハイ御新造に貰つて下さらなくとも床の揚下しとか勝手許の事でも爲せて下されば夫れで宜しう御座います」と獨りで饒舌り散らして居る半之丞は烟に捲れさうだ、側に娘は恥氣に座つて居て顏を眞赤にして居る ×「何うです菅谷さん何とか御挨拶を下さいましな、半之丞イヤ全く今申した通りの次第却つて獨住の方が氣樂な譯……」ト云ふと何んだか此おきんさんとやらを氣に入らんとでも申すやうに聞えますが實は某も能く御氣質は存じて薩ながら感心な方だと思つて居る位……夫りやア御近所に居る方ですものう其の位の事は存じて居ります ×「之れは妙だ爾う御存知ならば如何で御座います置て住きますから何分とも宜しく……」と云つて立去らんとする半之丞は慌しく裾を捉へ 半之丞「待つて下さい御

深切は忝なく存じますれど若い男一人の處い若へ女を置て往かれてはお互に迷惑を致します何うか此儀は平に御免を蒙りたい」と斷つて謝絶りましたから

×「爾う仰しやられちやア何うも仕方がない……きんちやんや何うも菅谷さんはお若いに肖合はず御堅いので手が付けられない幾ら此方で思つても仕方がない大方斯うして御一人で居らしつても御國か何處かに許嫁でも御有んなさるんだらうよ諦めなせい……ヨ諦めなよ」と女はワッと其處へ泣き出した

×「チイ〳〵爾う泣かれちやア困るなア俺ア板挟みだ……何うでしやう菅谷さん御無理なお願ひですが此娘も之れ程に……正直に申し上げれば貴郎のお側に居て御世話を申したいと云ふんですものう……武士は物の愍れを知ると云ふ事がありますさうですものう少しはお察しなすつて下さい」と頻りに半之丞

丞に迫る、併し半之丞は女の心根を聞いて見れば實際可愛想だがナカ〳〵女の涙で心を左右されるやうな人物ではない……詰り道理の制裁をもつて

感情に左右されぬとでも云ふので御座いませう 半之丞「幾度繰返して云つても同じ事何うか某の切なき心もあることゝ御察しなすつて下すつて今日は御引取りを願ひます ×「夫れでは何うあつても駄目ですかナ……宜しう御座います却つて御無理を願つては濟みません、きんちやん歸つてトックリ勘辨する方が宜いよ」と漸の事と立歸りました跡で半之丞はホッと息を吐き 半之丞「何うも斯う往くところで女に祟られては仕方が無い何んでも身を堅固に持つて門口へは「女禁制」の札でも張つて置かうか知らん」と其日は國許の事など考へ込んで早く戸を引て臥て仕舞ひました翌日になりますと手習子供が大勢參りまして先づ氣も取紛れて居るが夕景になれば皆立歸つて仕舞う其晩火灯し頃になりますと ○「御免下さいまし 半之丞「ドーレ……」立出でゝ見ると門口に立つて居るのは昨日來たおきんさんだ 半之丞「ヤアおきんさんか きん「ハイ昨日は飛んだ失禮をいたしました夜分伺ひましては恐入りましたが一寸お咄し

いたしたい事があつて……半之丞「左樣で御座ろか……コーツト困つたな一寸之れから外へ出たいと思つて居りましたが、きん「左樣で御座いますかハテは丁度宜しう御座いますが歩行きながら御咄しいたしませう」半之丞も外へ出ると云つたら歸るだらうと思つて居たのに一緒に歩行き乍ら咄さうと云はれたので挨拶に困つた半之丞「デは據どころない外へ出るのは見合せませう」とトウ〳〵澁々ながらおきんを一間へ通しました……

お家の大變を聞いて半之丞赤穂に趨す

○第二十五席

内藏之助特に忠を賞して歸參を許す

エ、引續いて言上いたします賞谷半之丞の傳記……おきんは一間へ通されましたが只恥かしさが先立つて暫し默然として居ります、半之丞に於ても自分は潔白清淨な身でもう、若い女と若かも夜中相對座して居つては如何にも後ろめたく思はれ迷惑千萬なことで御座いますから半之丞「時におきんさん

御用向は何で御座いますか何うか仰しやつて下さいましきん「ハイ……半之丞「何う云ふ御用で御座いますかきん「夫れでは思ひ切つて申上げませう私は昨日も恥かしいお咄しを作造さんに頼んで申上げましたが詰り思ひ込んで生涯夫と思ふのは貴郎一人心に許したお方で御座います……下申し上げると何だか突然に氣狂ひじみた女だと思召すで御座いませうけれど昔しからの咄しにも心に許した夫には操を立てろと云ふ事も御座いますれば例へお側に居られません迄も私の心に變りは御座いませんから能く打明けて御咄し申したいと思ひますので何うか不愍な者とお察し下さいまし」と云ひさして下俯向いて居ります實に之れだけの事を云つたのは娘の未懲心で一生懸命で御座いましたでせう、半之丞も決て慕ふ女を惡く思ふ筈はない殊に血氣盛な時であつて見れば情にほだされんと云ふ事は御座いませんが志の堅い事は鐵石の如くである故篤と聞終て膝を進め半之丞「おきんさん實に御志

の程は能く分りました決して貴女の仰しやる事は忘れません生涯岐度思つて居ります、ケレども儘ならぬが浮世の習ひ某は今何うあつても結婚の出來ぬ事情があります夫れで事によれば一生獨身で暮らすかも知れぬ……と唯斯う申し上げると何んだか身の暗いやうにも思召すかも知れませんけれどソコは云ふに云はれぬ譯のあることですから何うか折角の思召ではあるけれど思ひ直して下さいまし……殊に女は他へ嫁入する迄は品行を大切にしなければならぬこと……又一旦嫁入をした上は夫を大切に苦樂を共にすると云ふ考へがなければなりません親の云ふことを聞いて那れならば夫に持つても不足ないと思ふ人があつたなら其時こそ速に嫁付やうにいたさないと詰りは一生身を固める事が出來ないやうになる……嫁入りしたては見ず知らずの夫で氣心も知らぬとは云ふものゝ終生の夫婦であると思へば双方打解けて氣も知れて來るし量見も分つて來る事は瞬く間で御座れば操と云ふは

其時夫に對して立てるもの親も許さず自分一人で思ふ男があると云つて操を立てる抔と云つては夫れこそ飛んだ間違の基……之れは取りも直さず浮氣女のすることであるから直に心も變り易い、シテ見れば少し量見のある男なら決して爾ういふ浮氣ポイ、向ふから膳を据えるやうな女の箸を取るやうなものはありません夫れに年の若い内には兎角思ひ違のあるもので那の男なら自分の夫としても差支ない是非那の人の處なら往きたいと思つても經驗のある親御の目から見たら缺點を見出す事のあるもの今年氣に入つて居たものも來年氣に入らなくなると云ふのは世間にある習ひ好いた同士の仲でも喧嘩をするやうなのは全く表皮の考へで好く心の底まで見拔く力がないからです詰らない唄にも『私しや克く見て克く惚れる』と云ふ事がありますが能く考へて御覽なさい全く夫れに違ひないから……何んでも年の若い時分に好いた好かれたと云ふやうな者では生涯夫婦の間の幸福を得られると云ふ事は

少ない、夫れは稀には爾ういふ人の無いとは限らないが自然睦まじいやうに見えても夫婦の禮儀がないから他外から見たら見悪いものお取膳で晩飯をたべるなどゝ云ふと如何にも浦山しいやうだが眞に羨むべき事ではない高が野合あひの夫婦だものう……眞の愛情のある夫婦ならモット樂しい和合は澤山あるそれ故某は正當な結婚をして眞の愛情をもつて夫婦になるのは贊成だが若年のときの淺捗な考へで好いた同士の夫婦などゝ云ふものは野卑な動物に近い夫婦と思はるから一家が如何にも卑しく見えて好ましからん次第、感情をもつて成立つた夫婦は大嫌で御座る」と半之丞はおきんに對して異見めかして己れの夫婦論を持ち出し大氣焔を吐きましたおきんは呆氣に取られて何が何だか譯が分らないけれど迚も此勢では押入女房になる譯に往かぬと思ひましたので艸々に立歸りまして之れより半之丞の事は思ひ切つたと見えたが全く之れ等は感情的から發情した獸慾でありますから悪嫌なことを云

はれゝば直ぐに氣が變つて仕舞う……若しも此樣の男女が夫婦になつたら仲の能い時は人の羨ましがる程に見えても中に禮義と云ふものがないので丁度牝犬と牡犬と狂うて居るのと同じことだ夫れだから一朝双方の間に氣に喰はんことがあらば直ぐに喧嘩沙汰となり近所隣の厄介になる『夫婦喧嘩は犬も喰ぬ』と云ふのは詰り感情的の夫婦間と云ふので御座います……余事を申上げて恐れ入りましたが半之丞は漸々の事でおきんを追拂つたので之から近所の人は菅谷の旦那は女嫌ひだと云ふ事が通り名になつて誰も女房の世話を仕やうと云ふ者がなく半之丞は結局之れを氣樂に感じました之れより凡そ十四年間と云ふものは江戸に居り失れゝ淺野家の方とは往來して居りましたデ御座いますから緒大小となく孰れも出來事などの分らぬ事は御座いません然るに元祿十四年三月十四日勅使下向の砌り主君内匠頭は吉良上野介を殿中に刃傷いたしました爲め切腹仰せ渡され終に淺野家は滅亡と云ふ

事になりましたので半之丞に於ては最早ベン〳〵として江戸に居る譯には參りません 半之丞「例へ國表を缺落いたしたにせよ今日に至るまで更に御高恩を忘却いたさん忠義に於ては決して後れは取らぬ積りだ」とソコは忠義一徹なる人物……娘に涙を飜されて情を口説かれても應じない程の堅人で御座いますれば猶豫する場合に非ずと直ちに家財道具を賣拂ひましたが茲に半之丞の爲めに尤も感心いたしたるは殿より頂戴いたした五十兩の金に少しも手を付けぬ事と浪人の間も至つて節儉いたし少しも無駄な事には費用を使はない夫れが爲めに千兩ばかりの貯金が出來た……ナニシロ口でこそ千兩と申しますけれど其頃の千兩は今之一萬圓以上で御座います夫れ故ナカ〳〵一人で持つて往くなど云ふ事は出來ませんから馬に其金子をつけて江戸表を出發致しました、デ途を急いで赤穂城へ參り早速城代大石内藏之助に對面いたしました、ケレども内藏之助に於ては既に十四年も前に國表を欠落いたし

たし殊に其頃は若年の半之丞でありましたから今對面したところで充分心覺えがない 内藏「成程爾う仰しやられて見れば何うやら幼な顏も見えるけれど悉く内藏之助見忘れて仕舞つた 半之丞「左樣に御座いませうナニシロ御國表を欠落いたしました次第で御座いますが其節殿の仰には之々云々と之れより御別れ申す時に拜領いたしたお腰の物及び五十兩の包金を其儘證據として御覽に入れ猶萬一の時にもと思つて十四年間丹精いたし貯へて置いた千兩之金を軍用金になりと御遺下さるやうに且ツ吾身も一方の守り口を承り花々しき防戰して相果てたき旨を詳しく述べました内藏之助もホト〳〵感心し 内藏「如何さま其志は殊勝の至りながら何分一旦涙人いたして十四年間も經過して見れば淺野家の家來ではない、兎に角一度評議いたした後でなくては城内へ入る事も叶はぬ故其れ迄城下に宿を求めて居るが宜い緒の定り次第此方から通知するから……」半之丞も少しく失望いた

した去り乍ら内蔵之助の云ふ處は如何にも御尤の次第で御座いますに依り半之丞「去らば何分とも御協議の程を願いまする……仰の如く一度浪人こそいたしましたが十四年間君の御恩は決して忘却いたしませぬ忠義に於ては一歩も跡へは引かぬ覺悟に御座います故是非共御引受下すつて亡君の御爲め一方の防矢いたさるゝ樣御盡力の程を仰ぎ奉ります」と云つて一先づ城下の小坂屋と云ふ旅宿へ泊つて内蔵之助の吉左右を待つと云ふ事にいたしました……デ内蔵之助に於ては菅谷半之丞の事を近藤源四郎等の三勇士に相談いたしますと源四郎は第一番に不賛成だ源四「夫れ以前は淺野の御家臣であらうとも今日は浪人いたして居るし殊に欠落いたして十四年間にも相成つて見れば必ず爾う申込んだところで忠義なるや或は不忠義であるやは一朝一夕には分る譯のものでは無いと存じますナニ菅谷半之丞一人入城いたさうが致すまいがソンナ事で籠城が叶う叶はぬとは申されません此儀斷然お謝絶あつて然る可く存じます」近藤源四郎は屹乎と言ひ放つた跡の二人も同じく源四郎に賛成で御座います茲に於て内蔵之助も如何いたさんかと存じましたが例令一旦浪人いたしたりとて忠義の者は二君に仕へず此度の大變を聞いて駈付けましたに依り之れ等の者は入城を許し半之丞一人拒絶いたすと云ふ譯には參りません故内蔵之助は早速使を半之丞の許に遣はしました故大に喜こび籠城いたさんとする處其議も成らず花岳寺の切腹も破滅して復讐の企と相成りましたら半之丞も四十七士の一人と相成り元祿十四年極月の十四日吉良家へ討入り本懷を遂げまして御座います

○第二十六席

俵星玄蕃酒僻の爲に國を出づ

富森助右衛門が慳貪蕎麥を賣りまして俵星玄蕃といふ槍術の名人が吉良家へ御抱へに相成りまするを思ひ留めました事實を一席言上いたします……

一體俵星玄蕃と云ふ槍術家は素嶋原藩の浪人で御座いましたナニシロ其頃俵星玄蕃と云つては日本國中知らんものは無いと云ふ程の名人で御座いますから浪人したからと云つて仕官の口を求めれば何處へ往つても口の無いことは無い處が玄蕃は至つて大酒家で御座いまして窮屈なることは大嫌いだ

玄蕃「馬鹿〳〵しい千石や二千石の高を貰つて肩身を狹く小さくなつて居なくたつても宜い何處へ往つても此玄蕃の名を知らぬ者はない江戸で一ツ道場でも出して見やうと磊落な先生で御座いますに依つて本所龜澤町へ參つて道場を立て〻居りました處が最初の内は少しも弟子と云ふ者が來ない大きな道場にポツランと一人で居ります 玄蕃「ア、江戸と云ふ處は不自由なところだ此玄蕃が道場を開いて一人たりとも弟子の附かんと云ふのが妙だ」と玄蕃は夫れでも平氣でもつて居ります 處が或日の事で御座いました×「頼む〳〵……玄蕃「ドーレ……」と云つて玄關へ出て見ますと見なれない男が

三人立つて居る見れば侍では無し町人では無し何う見ても遊人だ玄蕃先生は素と侍とは云へナカ〳〵斯ういふ社會の情には通じて居りますから玄蕃「ハ、ア妙な奴が舞ひ込んで來たな何の用で來やがつたんだらう」と相變らず醉眼朧朦として見て居る ○「エ、先生で入らつしやいますか 玄蕃「某が當道場の主だ ○「左樣に御座いますか……」と後を振向きながら ○「何うだい兄弟一ツ御免を蒙らうじやれいか……エ、先生御願ひがあつて伺ひましたから切望奥で御咄しいたしたう御座います 玄蕃「宜しい遠慮はない昇るが宜い某一人で淋しく思つて居たところだ」とソコは玄蕃は武藝者の事ですから淡泊なもので御座いました」 ○「お初にお目に懸りました 俺は此町内の若い者で御座いますが御願が御座いまして……玄蕃「何か申して見るが宜い某の身に叶う事なら何んでも叶へて遣はす ○「有難う存じます……エ、先生之れは誠にお恥しう御座いますが何う

か召上つて下さいましと一升樽をソコへ出しました酒と來ては目のない俵星玄蕃である故「玄蕃」之れは甚だ恐縮だのう先きへ禮物などを貰つては氣の毒だがの……マア好物なものだから貰つて置くとしやう扨用事と云ふのは何んであるか ○「ハイ外でも御座いませんが夜分道場を拜借いたしたいのですが如何なもので御座いませうか……別段取ちらすやうな事は致しまんですが一ツ御都合が宜かつたら御貸しなすつて下さい其代り家根代は納めますから、玄蕃「ソム道場を貸して呉れと申すのか成程此れは一寸困つたなア何時弟子が出來て夜稽古をしないとも限らないが其時になつて家根代を貰つて〻見ると〻ソー直ぐに明渡しを請求することも出來ず夫りや折角だがお斷り申さうよ ○「イエ先生ソンな堅苦しい次第では御座いません家根代と申すと何んとなく廉も立ちますけれど……夫れでは斯ういたしませう何時でも先生の御都合の宜いときに明渡すといたし御酒代として差上ることにいたしたら別段御不都合

もなからうかと存じますが如何なもので御座いませうか 玄蕃「成程爾ういふ譯なら宜い使ふ事に就て異存はない ○「夫れは有難い仕合せに存じます少し大勢參りますが知れませんが夫れも御承知なすつて置て下さいまし」と云つて件の三人は立返つて仕舞う、玄蕃は何んなとをいたすのやら何の爲に使用するやら开んなことは更に聞きも仕なければ別段氣にも留めない其内に日が暮れましたが宵の口には誰も來る者もない 玄蕃「何でも今夜から參るやうな咄しだつたけれどモー追々更ける斗りだから明日の晩でも參ることだらう、ドレ寢やうか」と床を伸べて臥せらうといたしました、處へドカ〳〵と十餘人の者が件の三人を先きに立てゝ ○「先生御賴申します……エ、御賴申ますドン〳〵〻〻〻」と戸を打きますので玄蕃「誰だい今時分最う寢る處だ ○「御氣の毒さまですが一寸お明なすつて下さい日の内御願ひ申して置いた者が參りました 玄蕃「左樣か夫れでは今明けて遣はす」と表の戸を明けて遣ると十四五名の

者はゾロ〳〵這入つて參り一同「先生今晩は……飛んだ御厄介になります

玄蕃「サア遠慮はいらぬ道場へ通るが宜い某は酒を呑んで大きに眠くなつた奥で寢るから」と悠氣な先生ですから一同を道場へ通して置いて自分は寢て仕舞う ×「エライ悠氣な先生もあつたもんだなア武藝者なんて者は皆那かしらんと一同餘り淡泊なる玄蕃の擧動に驚いて居りました癪て件の若い者等は道場へ蓆を敷きまして取出したる賽の目扨は一六勝負の宿に借りたので御座いましたが玄蕃先生开んな事は御存じなく〳〵寢て仕舞ひました……夜中頃に相成り不圖目を醒して見ると未だ一同の者はコソ〳〵何か致して居る

玄蕃「何をいたして居るだろう」町内の相談事でもあるか知らん大分當節は夜更けると物噪だと云ふし寒空に向つて參つたので火付などが多くて困ると聞いて居るが」と臥床を立出でゝソツと道場を覗いて居ると怪しからん天下の御法度なる賭博をいたして居りますので今や最眞中で頻りに爭つて居りま

す玄蕃「ひどい奴が居るものだ最初借りやうと申込まれたとき何に用ひるのだと尋ねて置けば宜かつたものう一ツ脅かして遣らうか……」と寢卷のまゝがラリと障子を明けて玄蕃「チイ〳〵怪しからん事をいたして當道場を汚すなどゝとは以つての外だ一同の者ソコ動くな唯今玄蕃が芋差しにいたすぞ」と大喝一聲罵つた處で孰れも驚くかと思ひの外○「マア先生爾う御立腹なつては困ります貸して下さると仰しやつたからには何に使はうと此方の自由じやありませんか」と平氣で遣つて居ります玄蕃も一同の度胸の宜いのには更に驚いたが此時親分らしい者座を立つて玄蕃の前へ來り親分「先生何共相濟ぬ儀には御座いますが夜分のことではあるし旁いたします故何うか見て見ぬ振で御貸しなすつて下さいまし就ては御酒代として唯今寺錢を差上げます夜明けに程近う御座います故最う暫らく御不性なすつて下さい」と事を分けて賴みますから玄蕃だつて威張つては見たものゝ芋差しにいたさん量見では

御座いません故、玄蕃「左様か爾う云ふ譯なら宜しい其代り酒代は澤山寄越すだらうナ」親分「夫れは最う大きいのが出來る程差上ます」玄蕃「ウム夫れでは成べく大勢參るやうに申渡すが宜らう」正逆に武術の先生が夫れ迄にも仰せられますまいが兎も角も默諾いたしたものと見えます……デ其晩は初日の事故ソー大勢參つた譯でないが飲料位は置いて一同「ドウモ先生御邪魔をいたしました又今晩も參りますから何分御願ひ申します……何うか芋差しなんと脅かしこなしにへ、こ、こ」玄蕃は一同の立歸りて仕舞つた跡で此日は別に酒料に乏じくも御座いませんから終日飲んで醉ひつぶれて仕舞ひ夜分に相成つたも知らん程であつたが夜中頃になつて不圖眼を醒して見ますと居間には行燈が點て居まするし道場では昨晩の通り頻りに丁半を爭つて居る玄蕃「何時の間に參つたのか知ら往つて樣子を見屆けて遣らう」と玄蕃先生は又も道場へ參りますと親分は早くも之れを見て親分「先生御邪魔を致しま

た玄蕃「今夜は大分大勢だな」物珍らしいものですから側に見て居ると、×「如何です先生御慰みに遣つて御覽なすつたら爾う心持の惡い事でも御座いませんぜ」玄蕃「爾うか併し某は少しも譯が分らん武術ならば假令弓鐵砲が飛んで參つても驚くところはないが……マア止さうよ」×「左樣で御座いますか夫れでは俺が教へて上ませう」惡い奴があつた者でトウ〳〵仲間の者が教師になつて玄蕃に一六勝負の遣り方を教へて遣る元來物に頓着いたさぬ氣質で御座います故面白半分に遣つて見る然るに斯ういふ社會の常として知らぬものには最初の中は勝たして遣つて自然面白味を教へて遣る此れが仲間の手ださうで御座います玄蕃は夫んなことは知りません故張れば勝つと云ふ有樣故ツイ其晩は興に浮れて夜明け方まで遣つて居たが大分勝つた上に寺錢まで貰ひましたから玄蕃「成程町人共が金錢を弄遊ぶのは面白い筈だ之れは侍たる者の決して耽けつては成らぬ者だ」と幾ら磊落な方でも己れの行ひ

に就ては上の御法度を冒すやうな事はいたしません翌る晩になりますと又一同の者が遣つて參つて △「先生今晩も如何で御座いますか何にも知られいなんと仰しやつてナカ〳〵お手際は甘い物で御座います 玄蕃「甘く云つて居る某は手なぐさみは大嫌ひだ今夜は最う御免蒙る ×「爾うですか勝逃げは卑怯で御座いますぜ 玄蕃「卑怯は結構だ進退宜しきに從ふのは兵法の奥手だ其の位の事は心付かん玄蕃ではないマア其方達で緩くり遣るが宜い大分お陰で懷中も出來たから之れより夜通し飲明す積りだ △「チヤ〳〵此奴は一杯喰された成程兵法の奥手を出されちやア叶ひつこありや仕れい」と初心者と思つて斯んな失敗を取つた故一同も流石侍は魂の入れ處が違つて居ると感心いたして居りました斯くの如く道場を賭博の爲めに使用いたして居りましたから忽ち其評判が高くなつて俵星の道場は博奕宿だと云ふやうになつた……玄蕃は之れを聞いて玄蕃「此奴は飛んでもない惡名を受けたものだ以來斯いふ事は止めなくては何時まで經つても弟子の付きやうがない博奕宿へ大事な息子を寄越して博奕打にでもなつたら夫れこそ大變だと思つて入門させぬのは親御の身としての人情であります其處を曉つたから一同の者に斷然道場貸間いたすこと謝絶いたすと云ふ斷りを申しました素より若い者等もナグサミ事の事であつて見ますれば強いて借りて置くと云ふ譯にも往かず其儘に相成ります翌日玄蕃に於きまして道場の前へ立札を出しました

一當道場に於て賭博宿をいたし候事有之やの噂あれども事實は相違なき事に御座候尤も夫れは今日より以前の事に候へば以來御心置きなく御入門なさるべく腕前は充分御試の上にても差支無之爲念如件

寶藏院流槍術師　俵星玄蕃

と云ふ今で申せば廣告で御座いますが斯んな立札を出したから孰も奇異なる

事に思ひ立逢ひに參りました上入門いたさうと奇を好むは昔も今も違りは御座いませんこれより試合に參る者も澤山あるがナニシロ天下に名の響いたる俵星先生の事で御座います故誰一人及ぶものは無い夫れが爲め流名を慕つて僅かの間に門人が大勢出來ました玄藩「世の中は妙なものだ此間迄は一人の門人もなく廣い道場に無聊に苦しむ位であつたが那の立札を出してより此の方は引きも切らぬ程入門者があるが不思議なものだと最初の中は弟子入が澤山あるので自分も大きに張合に相成り一生懸命に教へて遣る故弟子の方でも頗る喜こんで居る甲「何うだい山田宜い先生を見付けたんで充分武藝も覺えられるぞ之迄の近藤先生の道場では全然進物次第で心持が惡かつたが今度は斯んなことは更になく誠に侍氣質の先生で門人の身に取つては有難い譯だ乙「大きに尤……何うして那いふ大先生が此本所に居ると云ふ事が解らなかつたらう昨夜親父にも聞たが那の先生は九州の御浪人で日本

一と云はれた方ださうだよ甲「日本一ッ……左樣だらう道理で強さうだ拙者などが見たところでも近藤先生より腕前は遙か上だからな」と門弟中にも大分評判が宜しい夫れ故此頃になつては身入りも宜しくなるしいたしたので以前と違つて旨い酒の一杯も飲めるやうになつたから付いた癖と云ふものは直きに出たがるもので又も酒を飲み初めました玄藩「何うも斯うして一日教へて居ると幾ら鍛へた身體でも勞れが參るから晩餐に一杯位は宜いだらう……全體弟子入のあつたときに酒はプッツリと止めやうとは思つたけれど夫れでは却つて身體の毒だ」と玄藩先生詰らぬ處へ理屈を付けてトウ〳〵お酒を召上りました一杯が二杯、二杯が三杯だん〳〵醉つて來るに從つて度を過すやうになる明る朝は夫れが爲め教授いたすにも少し太儀で御座いました正逆が酒を飲んだ爲め今日は頭が重くて迎へ酒でも遣らなければ教へる譯に往かんと申されません故滋々道場へ出て一人〳〵に教へて遣る、グレども飲み出

したら酒は留度が御座いません翌ろ晩も又明ろ晩も飲むと云ふやうな次第で遂には稽古を休むやうな譯になりましたが腕前の出來る先生で御座いますから別段酒癖位では退場いたさうと云ふ者もなく相繼らず道場は盛んに御座います然るに此頃に至り毎夜の如く風鈴をチリン〳〵と鳴らして慳貪蕎麥を賣りに參るものがありましたが夜稽古が濟んで孰れも腹の減つて居る處で御座いますから試に道場へ呼入れて喰つて見ると夜鷹蕎麥にしては實に旨い夫れが評判になつて慳貪蕎麥屋は此道場が御得意と相成りました

一體此當時吉良家に於きましては淺野の家臣が何時仇をするかナニシロ大石藏之助と云ふ智勇拔群の士が附いて居る事故非常に心配して警戒を嚴重にいたしました殊に多くの武藝者を抱へイザと云ふ時には充分手配りをいたして拒ぐと云ふ事に夫れ〳〵評議も成立つて居る……然る處此頃天下無双なる槍術の名人俵星玄蕃がヂキ近所へ道場を出して居ります事故何うか召抱へた

いと云ふ事を吉良家に於ては協議いたして居つた此事を聞及んだる義士の一人富森助右衛門は助右「之れは何しても吾黨の爲めには非常なる大敵である何うか召抱へさせないやうな趣向はなからうかと種々思案を運らしたが何うも旨い考へも浮ばないソコデ大石内藏之助の處へ訪れて一伍一什の咄しをすると内藏「那の玄蕃を抱へられたることならば味方の爲めに如何なる損害と相成るやも圖られない彼れが槍先きに立つものは恐らくは天下に一人もあるまいと思ふ殊に討入りも近付いて參つたれば何んとか樣子を探つた上に謀を施し當分喰止めの策を講じなくてはなるまい」と云ふんで之より兩人密々相談を遂げ助右衛門は慳貪蕎麥屋と相成つて俵星の道場へ入り込みました次第で御座います爾ふ云ふ次第に御座いますれば素より利益を得やうと云ふ譯ではなく元を切つて賣るやうな譯だから門弟共は大層喜んだ……サア夫れが評判と相成つて夜稽古を仕舞う時分には實に眼の廻る程忙がしい ×「チイ蕎麥屋此方

へも天なんを熱くして早く拵らへて呉れ先刻から待つて居るんだぜ助右「へイ〳〵唯今……御待遠さまで御座います」「蕎麥屋吉田より某の方が先口だぞ困つたな」「西村斗んな意地の悪い事を云ふなお手前はモウ五杯も換へて置き乍ら拙者は見られよまだ二杯目の代りだ」と互に爭つて居るから蕎麥屋もソ一人の手では廻りませんゆゑ翌ろ晩になりますと又彼是ドタ〳〵するのが厭だと見えて『込合のせつは前後御容赦下され度候』と云ふ張札を出した門弟中は之れを見て甲「之は蕎麥屋に旨く遣られた之れちやア成丈け手近に居る者に旨くやられて仕舞う」乙「爾うさう夫れでは拙者がモー一ツ旨い張札をしてやらう」と道場の隅で何か認め乙「サア書けた……見て呉れ此通りだ」丙「成程懷中物御用心……」とは旨く酒落られたアハ、、、、と一同大笑ひになりましたが此事玄蕃先生の耳に入り玄蕃「斗んなに旨い蕎麥なら某も粜酒の肴に註文いたして見やう」と斯う思召したものですから玄蕃「山本〳〵……

山本「ハイ……」玄蕃「お手前は慳貪蕎麥を喰つたか」山本「唯今七杯ばかり喰ましたが汁が間に合ないと云ひますから一寸仲休みをいたして居ります」玄蕃「能く喰ふ奴だ……が未だ少しは殘りがあるやうか」山本「左樣で御座いますモー大れ〳〵口が懸つて居るやうで御座いますが先生が召上るのなら何うにか繰合せをいたさせませう」と山本は庭口へと參りました

ス山本「イヤ〳〵拙者の注文ではない唯今先生が粜酒の御肴に召上らうと仰しやるので何うか二ツ三ツ繰合しては呉れまいか」助右「畏りました早速拵らへて差上げますで御座いませう」先生の御注文だと云つては誰しも遲いの早いのと云つて不服を云ふものは御座いません助右衛門は素より胸中に謀のありますと事で門弟等に蕎麥を賣込まうと云ふ趣意では御座いませんから豫て特別製の蕎

麥が用意して有る……夫れを充分に旨く拵へて 助右「ヘイお待遠さまで御座います外にトじのヌキが一ツ御座いますが廣告の爲めにお試しになつて下さいまし」と云つて盆へ載せて出しました玄蕃先生は高が夜鷹蕎麥屋の事であれば左して旨くもあるまいと云ふ考へで御座いましたが一口召し上つて見るとナカ〳〵旨い 玄蕃「ウム之れぢやア弟子達が大噪する筈だ……チイ〳〵山本〳〵 山本「如何で御座います馬鹿に出來ませんで御座いませう 玄蕃「ウム結構だなア實はお換りを頼みたいんだ 山本「承知いたしました……チイ〳〵蕎麥屋先生が最う一ツお換りださうだ 助右「有難う存じます……」 助右衛門は出來る丈旨く拵らへたもので御座いますに依り頗る玄蕃の氣に入りまして一晩でも蕎麥屋が參りませんと一同大失望……稽古も手に附かんと云ふ始末で御座います

助右衛門も大分道場の評判が宜しう御座いますから試に二晩ばかり商賣を

休んで見ました之れは俗に云ふ商賣の奥の手で之れで人氣を圖るので御座います爾うして翌晩になつて參ります ×「チイ〳〵蕎麥屋ナゼ二日も休んだ斷はりなしに休んでは困るぜ之れから鍛勤の晩は前以つて屆を出して置くが宜い先生も大層御待兼だつたぞ 助右「有難う存じますツイ噪が風邪を引きましたものですから夫れが爲めに休みましたので決して休みたい次第では御座いません △「ナニ噪なぞは何うでも宜いや死んだら代りを捜して遣るよ 助右「御冗談斗り仰しやいまして……ヘイ〳〵お待遠さまで御座います」と二晩休んだ爲めに一同三晩分程も喰はうと云ふ勢夫れが爲め一時に賣切れて仕舞つたケレども支蕃の分はチヤンと他へ別にして御座いますから別に先生の寢酒の御肴の分は取つてあります、ナニシロ門弟等も二晩休まれて渇望して居る處へ來したものですから 甲「蕎麥屋以來は他へ廻つて來ると云ふ事は止めにしたら何うだい幾ら澤山あつても擔いで來られない程は持つては來られまい必ず殘物の出ない

やうに當道場で引受けるから早く來て支度をして置くと云ふやうなことにいたしたら宜らう　助右「有難う存じます夫れでは爾ういふ事に願いたいもので御座います」と云つて助右衛門は之れより俵星の道場へズツケ參つていろ〳〵支度をして居りますケレども蕎麥の事で御座いますから爾う前から支度もいたしては置けない依つて道場の隅の方へ參つては頻りに槍術の稽古をいたして居るを見て居ります……處が玄蕃先生は稽古を付けながらも助右衛門の何氣なく見て居るやうだが自ら眼の付け處の違つて居るのを御覽になり

玄蕃「ウム之りやア決して唯の蕎麥賣りではないぞ必ず由緒あるものに相違ない」と云ふ事に御眼が止りましたから或晩の事で御座います御稽古も仕舞になり門弟衆も蕎麥を喰つて孰れも立歸りましたから助右衛門も荷を擔いで歸らうとすると　玄蕃「ヲイ蕎麥屋一寸待つて吳れ　助右「ハイ御用で御座いますか

玄蕃「イヤ〳〵別段用も無いけれど今宵は何となく物淋しいから宿泊つて參ら

ぬか此廣い道場に夜になると唯一人、何うだ都合が惡くなければ宿泊つて參れ　助右「有難う存じます　玄蕃「宿泊ると決心いたせ……家で女房が待つて居ると云ふ譯でも無いだらう　助右「イエ實は其女房が待つて居りますので……ケレども別段他へ泊りましたところで決して角を出して彼是申すやうな女では御座いません　玄蕃「夫れば感心な心懸けだ、デは泊つて參るが宜らう　助右「有難う存じます左樣ならばお言葉に從つて御厄介になりませう」と云つて支度をした荷物をば庭の隅へ入れ軈て上つて參りましたが　助右「先生未だ二ツばかりいヽヂが殘つて居りましたから御肴に拵らへました　玄蕃「夫れは却つて氣の毒だつたなア　助右「何う仕りまして御酌でもいたしませう」と之れから四方山の咄しの末　玄蕃「蕎麥屋拙者は知つての通り槍術指南であると云ふ事は其方も存じて居らう　助右「夫れは存じて居りますとも　玄蕃「然らば咄しいたさう……其方は慳貪蕎麥などを賣つて居るが決して根からの商人ではないな察する

處某と同じ流儀の槍術に達し居る者と見拔いたが何うぢや助右「へ、、何を仰しやるかと存じましたら詰らぬ事を仰せられます何も私が槍術などの出來ます者なら此樣詰らぬ商賣をグヅ〳〵致しては居りません……マア詰らん事を仰しやらないで私しがお酌をいたしませう」と玄蕃に星を指されたる爲め咄しを余所に紛らさんといたすを玄蕃「詰らん咄しではないぞ某の眼力は決して違はん積りだが……實は此方も此度吉良家より五百石をもつて召抱へんと申込れて居るのぢやケレども上野介は氣に喰はんのだ淺野内匠頭の家は滅亡しながら自分は安閑として居る、那れは侍たる可きものゝ成す可き行でない夫れ故某も大きに躊躇いたし居るが其方武術が出來るなら此處の道場をまかせて某は吉良家へ參つても見たいとも思はぬ譯でもないと云ふ譯はハヤ前借りをいたして五十兩ばかり遣つて仕舞つたシテ見ると其の義理に對しても抱へられなければならんけれど知つての通り淺野の浪士が切り込

んだ時の用心棒だ其の時は命を拋なければならぬが之れが反對に赤穂の浪士の味方いたす譯なら例令命を捨てゝも更々殘念なこともないけれど犬畜生にも劣るもの味方をするのは如何にも殘念な次第さ……併し其處が所謂金力でツイ五十兩前借しそして重寶だものだから使つて仕舞つたから何うあつても先方へ抱へられなければならぬがと云つて余りすゝんで往きたくはなし一日遲れに延して居る仕誼さ」と何の氣なしに語るやら又は心あつて語るやら助右衛門の肝には此談が莽々と答へました

併し助右衛門は夫れに對して何んと答辯いたして宜いやら唯モジ〳〵致して居りますゝケレども是れに對して彼是意見めいたことを申しては玄蕃にさとられると云ふ考へがありますから其夜は其儘寢て仕舞いました明る朝は早くより起出でまして臺所の事をいたして御目覺めの頃には整然朝飯の支度をいたして置く玄蕃「ヤア蕎麥屋一層早かつたなアチ、燗まで出來て居るのか夫れは氣

の毒だつた」と仰しやつたがツク〳〵助右衛門の樣子を見るに何うあつても蓄
參實りなどをする筈はないと云ふ鑑定であつたがソロ〳〵弟子達も參りますので朝飯を濟し助右衛門は道場より荷物を擔いで立去りましたが昨夜の咄しを聞いて初めて五百石で吉良家へ抱へられたと云ふことも確められ又五十兩の前借夫れに玄蕃の意向も知つたので荷物は我家へ投込んで飛ぶが如くに內藏之助の浪宅へ參りました　助右「大石殿漸く俵星の樣子を確めましたが實は之々云々……」で御座いますと昨夜の事に就て大略物語りました內藏之助は之を聞いて膝を打ち「內藏イヤ〳〵決して御心配には及ばぬ　某充分心算がある」と云つて耳に口寄せ何事か囁きました　助右「成程此儀は至極結構で御座います早速左樣遊ばしたら宜しう御座いませう」と助右衛門は贊成いたしました

四五日經過まするとと俵星の道場へ立派な侍が二人參りまして　侍「賴む賴

む……取次「ドーレ……」孰れから御越しになりましたか　侍「某は加州の藩士青木庄左衛門、本多采女と申すもので御座るが先生に一寸御意得たい」取次は其趣きを玄蕃に申しますと玄蕃「お通し申せ」と云ふので取次は一間へ御案內いたす其內に玄蕃は衣服を改め對面に及ぶと　庄、采「某は此度主君の仰を承り罷り出でましたる儀に御座るが藩中の子弟に槍術を指南いたすべきもの先生を於て他に之れなく是非共此儀御賴み申せとの次第に御座る……シテ食祿は千石又支度料として百兩御承諾さへ下されば早速御約束いたしたく御座います」玄蕃は之れを聞て　食祿が千石で當座の手當が百兩と云へば全然吉良家よりは倍だ某の腕前なら其位の價値は充分だ殊には吉良は那の通りの卑怯者加州は天下の大諸侯同じ主を撰ぶなら大諸侯に越したことない犬になるとても大家の犬になれだ」と玄蕃先生も早速胸に思案いたしました故玄蕃「仰の赴き委細承知いたしました何分共宜しく御推薦の程

偏に願上たてまつります　庄、乗「左様で御座るか早速の御承諾で忝ない、就ては茲に御相談いたしたき儀が御座る外でも御座いませぬが此度先生を御願ひいたすに就ては新たに道場を設ける積り依つて出體の上御出仕を願ひたう御座るが此儀如何なもので御座いませうか　玄蕃「夫れは決して差支は御座らぬ某も斯く道場を設けて居れば決して差支のなき事故御都合次第に願ひたく存じます　庄、乗「夫れは何より大慶に存じまする孰れ此趣き殿へ申上げ支度金は明日にも御届け申上げます」と云つて之より兩人は俵星の道場を立出でましたが之れは實に加洲藩から御召抱へに相成る譯ではなく全くは大石内蔵之助の策略にて斯うして暫し足を喰止め吉良邸へ召抱へられないやうにいたしたる次第に御座います玄蕃は夫れを知るや知らずや吉良邸は仕官いたし難き旨を答へ相變らず道場は盛んに門弟をば取立てゝ居りましたが茲に慳貪蕎麥賣の助右衛門はバツタリ參らなくなつたと云ふものは愈々元祿

十五年極月十四日に間近く相成りましたから夫れ〳〵の準備がある……俵星玄蕃は蕎麥賣の樣子を見ろに決して只者ではないと思ひましたが此程少しも姿を見せませんので扨は察しに違はず淺野家の浪人に違ひない何時ぞや夫れとなく樣子を試みたる處妙な顔付きをいたしたが夫れでは今に復讐の時機が參ろに相違ない其の時には一臂の腕を貸して吉良邸へ討入りし助太刀をいたさんものと心構へいたして居る果して極月十四日の夜雪を冒して四十七名の義士は吉良邸へ討入り山鹿流の太鼓は鼕々として鳴り響きました玄蕃は扨こそ今宵は淺野家の浪士討入つたに相違なしと手頃の槍を追取り吉良邸の表門へ參つて見ると今や戰ひの眞最中……此時門の際よりしてツカ〳〵と進み出でたる黒裝束の侍「待たつしやい孰れへ通られますか　玄蕃「某は俵星玄蕃と申すもの今宵淺野家の浪士吉良邸へ討入りと察し助太刀の爲め推參いたしたり大石殿に御對面いたし一臂の力を添えたく存ずる　侍「其御厚志は忝なく存

ずれども未だ御助太刀を願ふ程の場合にあらず何卒御引取り下され度御厚志は幾重にも御禮申上る」と此問答を聞及んだる富森助右衛門も同じく其場に現はれ助右「之れは〳〵俵星先生此程は種々御品貢に預り忝く存じます

玄蕃「ヲヽ何時ぞやの蕎麥賣で御座るか大方淺野家御藩士とは推察いたしたれど扨々忠義の御志感服いたす……御辭によつて御助太刀は申さんが若し門内へ入り邪覗いたす如きものあれば拙者一槍の許に差止めます御安心あれと云つて其場を立去りましたが引揚の時まで門外にて義士の爲めに警衛いたし居つたのは此玄蕃で御座いますが後に高輪泉岳寺に於て内藏之助に對面いたしたる節加洲藩召抱への義も一時の方便故侍にあるまじき詐りを構へたる旨を申し改めて内藏之助より詫を申上げましたが其後加洲藩にては此事を傳へ聞き千石にて玄蕃を召抱へたと申すことで御座いますが慳貪蕎麥と云つては有名なるお咄しに御座います

○第二十七席

忠孝共に重く義士血涙を流す
身命を捨て茅野三平君に殉ず

義士の面々は江戸表へ下向いたしまするは元祿十五年の正月で御座いました不破數右衛門、千葉三郎兵衛、菅谷半之丞、大高源吾等は孰れも大石内藏之助の許へ暇乞に參りました此時内藏之助は内藏「御一同江戸表下向いたすに就ては攝州なる茅野三平をも御同行なすつては如何で御座るか定めし彼れも通知を待兼て居る事で御座ろうと思ひますが一同「成程夫れは大きに御尤で御座る然らば其旨申通じろで御座いませう」と之より大高源吾、千葉三郎兵衛の兩名の名で内々江戸下向の旨を知らせました三平は之の書狀を見るより三平「扨は愈々一同の面々も下向いたすの時節と相成つたか何うか一日も早く本望を達したいもので」と夫れより書狀を認め承諾の旨を答へました然るに三平には一人の老父がありまして三郎左衛門と云つては若い時はナカ〳〵用

ぬられたもので御座いました、ケレども年老け殊に主家滅亡いたしたる故今は殆んど田舎に引込んで閑日月を送る事の外は他念はムいません殊に先年老母にさへ死に別れたれば今は力と頼むは悴の三平一人でありますから何うか一日も早く能き嫁でも迎へ早く初孫の顔でも見たいと夫れ斗り樂しみにいたし知邊の者に頼んで置くと幸ひ郷士の娘にお里と云ふ嫖緻よしの娘がありました夫れを或人が周旋いたそうと申すものですから三郎左衛門は大層喜こび

三郎「定めし悴に咄したら喜こぶことで御座らう何うか御周旋下さるやうに」

と頼んで置きました三平もウスく之れを知つて居ります故三平「之れは困つたことが出來た开んな娘の世話をされたりしては大望の妨げだから何うか體能く斷はりたいものだ开れに江戸表下向も程近くなつたれば夫れとなく父にも承諾させて發足いたしたいと或日父の前へ出で

三平「父上……此程江戸表なる傍輩から手紙が參りましたが能き口もあると申すこと故一日も早く下向いたし

たく存じます尤も左樣相成れば他藩の事にも御座いますが故何うか茅野家には相應の養子をいたし殊に先達より御咄しある郷士の娘を嫁合して下されば父、上も御安泰かと存じます何うぞ御暇を下さいますやうに……」と余儀なき頼みを聞及んだる三郎左衛門三郎「アハ、、、何事かと思つたら江戸表に相當なる奉公口があるに依つて下向いたしたいと申すのか……成程夫れも宜らうケレども能く考へても見る忠臣は二君に仕へずとやら殊に其方は平生虚弱にして亡君内匠頭殿であればこそ御慈悲深く相當の御用も勤まつたと申すものなれど他藩へ奉公いたして見るが宜い何んなに骨が折れる事か知れはせん夫れよりは此處に不自由なく暮して居る事も出來るものだものう嫁でも迎えて安樂に世を送る方が遙か増しであらうと思ふ夫れのみならず父とても最早余命もなき事なれば他より養子を迎へたところで甘く納まつて呉れゝば宜いが折合でも惡く一家ゴタ〳〵いたすやうでは實に心配で相成らぬ……何うか思ひ止まつて

吳れ江戸表へ參つて何んな宜い口があるかも知れぬが夫れば父の亡い後にして吳れるやうに之れ三平何うか其儀は賴んだぞよ」と涙と共に說き出されました

から君に忠なれば親にも孝……三平は斯く老父に申されて見ると夫れを振切つて參る事は出來なくなつた。三平「扨之れは困つた事が出體いたした同盟の約束として兩親兄弟たりとも此盟は打明さぬと云ふ堅い言葉をつかへて見れば今更ら打明けてお咄し申す譯にも往かず如何いたしたものか」と暫らく思案に沈んで居りましたが最早斯く相成て見れば父上に重言申上たところで却つて御立腹を增すやうなもの……夫れは能いとしたところで千葉大高兩氏には江戸表へ下向の事を承諾いたし送りしに今更ら變更いたす事は同士の者にも面目なし如何いたさんか迚も斯る次第と相成つては忠孝兩全の策は覺束ない死して亡君にお詫をいたすより外はないと思ひましたに依つて三平「父上左樣なれば御言葉に從ひ江戸表下向の儀は思ひ止まる事にいたしませう」三郎「爾

うして吳れゝば此父も如何ばかりか安心いたすか知れぬ何うか三平賴んだぞよ」と漸く安心の體三平は心の內に引り裂ける程で御座いましたが夫れより三日程經過ますと頃は元祿十五年一月十四日……十四日は兼て冷光院殿の御命日で御座いますから三平も今宵限りの命と思ひ獨り覺悟を定めまして夕方より父と共に快よく酒汲み交しました……之れとても名殘りの酒宴と思へば宛然血の涙で御座います軈て夜も更けまするに依つて父三郎左衞門は臥床に入る三平も我部屋へ這つて休む體に見せかけましたが三平「思へば〳〵儘ならぬ浮世である忠を欲すれば父三郎左衞門の思召に背き孝を欲すれば冷光院殿の御恨を晴すことも出來ず同士の者にも顏向けのならぬ仕誼と誓らく悲歎の涙に搔き暮れる勇士の熱涙……夫れから硯の墨を磨ながし大石內藏之助へ宛てゝ一通の書面を認め尙父にあてたる遺書を認め二通を机の上におき享年廿三歲を一期として兩肌を押脫ぎ腹搔切つて相果てましたが覺悟の上の事で御座います

れば更に動する處も御座いません夫れ故翌朝まで此事は誰一人知る者はなかつたが扨夜が明けましても三平は起き出でませんので三郎左衛門も不思議に思ひ部屋へ參つて見ると三平は朱に染つて床の上に打臥しに倒れて居るがハヤ絳切れて居りました三郎左衛門大に驚き四邊を見れば二通の適書が御座いましたが一通は自分への宛にて別段詳しい事も認めてなく唯相當の養子を迎へて夫れを以て三平と思召して下され折角御養老專一と遊ばせと云ふ事で御座いましたが端書に此手紙は大石内藏之助殿へ御屆け下されと云つて猶一通ありました故三郎左衛門は悲嘆の内にも三平の死因が分りません……殆んど泣くに涙も出でず唯呆然として居りましたが何か之れには深い仔細のある事ならんと悲しき内にも流石は淺野家の遺臣三郎左衛門でありますから亡き骸を能く茶毘の送りとなし夫れより密かに使を以つて内藏之助の許へ件の遺書を屆けました……三郎左衛門は杖柱と頼む三平に死なれて見れば今は世に望みなしとて親類の中より養子を迎へ已れは剃髪して三平の菩堤を弔らひました

内藏之助は三郎左衛門より三平の切腹の次第を詳しく認めたる書狀を見て大に驚き急ぎ取開いて見ます其文に曰く（遺文は義士銘々傳に據る）

一筆申遣し候拙者儀去年赤穂御城中に於て連判いたし候如く亡君の仇を討申べき覺悟にて御座候に付年内も度々仰下され候通り當正月中には江戸表へ下向と存じ罷在り候處父三郎左衛門一向に内々の大望を存ぜず江戸下向の事を堅く押留め誠に拙者の難儀言語に堪申候内々の樣子を聞せ候ばゞ嘸々欣び得心申可く候へども誓詞の表に違ひ候事如何と存じ堅く申聞せず候故愈々下向を免し申さず下向いたし申さず候時は連判の儀に相背き申候依て兩方へ相背き申さゞる致方と存じ切腹に及び泉下に於て亡君へ御目見え申上候て萬事御物語仕り先達つて御側に罷りある可く候各々樣には二月當中には豫ての契約の通り上野

介方へ亂入充分の御勝利在せられ追付け泉下に於て御目に懸り申べし今生の恨み亂入の時御供致さゞる段何程か殘念に存じ奉り候右の仕合せゆゑ是非に及ばず此段御意得可しと存じ粗々申遺し候條同意の御方何れも御殘り多く候旨偏に宜しく御傳達奉願候以上

一月十四日　茅野三平

大石内藏之助殿

と認めてありましたから内藏之助の驚き大方ならず　内藏「扨に命を抛つて忠孝兩全の道を圖つたかチエ、あたら惜しき侍を殺したり」と暫し悲歎の涙に暮れて居りましたが内藏「斯くなる上は致し方なし義士の同盟に連れ此遺書をもつて討入りの節は生前同行いたしたる如くなし忠死の靈をなぐさめん」と一同の者にも三平が忠孝の爲めに命を捨てたる旨を語り討入の時及引揚げて燒香をいたす時も三平は其列に加つたる事といたしましたが劇道などでは之れを

作換へてお輕勘平などの狂言に仕組み勘平さんは三十になるやならずに死なさんしたゞなどゝ痴情めいた事を演じますが三平は決して狂言でいたす如き人物では御座いません

○第二十八席　原惣右衛門の智謀は衆人の仰ぐ處

エ、伺ひますると原惣右衛門江戸下向の折から老母が自害して忠節を勵ますの一席に御座います……尤も斯ろ親孝行の惣右衛門故京都に涙宅を構へて居る内も常に母への消息は斷へずいたして居りましたが之れは江戸表下向前に送られたので御座います『一筆申上候私義此度江戸表へ參るべき存念にて兼々申上候通り只一筋に殿樣の御鬱憤を察し奉り御家の恥辱を雪ぎ度又は武士の道を立て忠義の爲に一命を捨て先祖の名をも顯し申度尤も許多御家來のある中ゆえ忠義の士も澤山に御座候に付成べくは生存へて母上樣へ孝養仕

度と存候得ども身に溢る鴻恩に浴し候事朝夕少しも忘れ難く然るに亡君には御大切なる御身を捨させられ捨難き御家をも顧見られず御鬱憤を遂んと遊されし候處御相手を討損じ却て淺ましき御生害をなされ候段御運の末とは申しながら無念至極の御事にて其時の御心底を押計り候へば一刻片時も忘るゝ暇なく然れども御短慮より起りし事なれば公儀へ對しては更に御恨み申上ぐべき樣なし其故御城を仔細無く差上申候併ながら亡君御遺恨ある所は吉良殿にて候得ば其敵を安穩にさし置べき樣御座なく依て直地に復讐仕るべきの處大學樣の御身分に係り候事もやと彼是差控へ候得ども已に其願意御採用是なき上は武士道を相立忠義の面々徒黨いたし復讐を計るより外御座なく候只々御身には御機嫌よく幾百年の御壽命を保たれ何事も時節を御待下さるべし殊に御齡もいかふ傾き玉へば嘸かし御心細く候りもあらぬ方にて御不自由勝に月日を送り遊ばし候はんかに如何程か心憂く存じ候得ども此段は力にも及び申

さず時に臨み事に依れば主命の御爲には父母の命をも背く事は義と申ものにて是實に默止がたき例しに御座候是等の道理は悉しく御存知なる母人の事ゆゑ只々粗略を筆に任せて申上候幸ひ法體の御身にましませば此後いよ〳〵佛へ御勤行のみにて憂もつらきも少しの間と未來の事を明暮御忘れ是なき樣世も穩になりなば寺へも折々御參り遊ばし候はゞ一ツには御身の御養生にもなり申べく候以上』之れ等は隨分心盡しの書狀で御座いまして惣右衞門の文信中にて名代の物で御座います斯樣な心掛けで御座いますから書面にも江戸下向の事を申し遣しても何うも一度母に生前の暇乞をいたして參らなければ氣が濟まない惣右「寧そ之れは一度赤穂へ立戻つて袂別いたし參つた方が宜しからんと云ふ考へから赤穂を差して參りました尤も赤穂と申しましても今は町家住ひで御座います惣右衞門は畫になつて少しく空腹に相成りましたから何處か中食ないたさんと參りましたけれど生憎茶店もない惣右「何うも不便なところだ

何處か立場でもありそうなものだのに……仕方がない然らば那處の木影で持つて參つた握り飯を遣ふ事に致そう」と惣右衛門は木影へ立寄りまして腰なる握飯を取出し頬りにたべて居るスルと頭の上で頻りに烏が鳴き立てますに因り惣右「烏鳴きは多く凶事を知らすると云ふが何か母上の御身の上に氣遣しい事でもありはしまいかと大に心配いたしながら食して居りますが何となく胸が一杯に相成つて二ツばかり殘りました惣右「斯うして置いたところで仕方がない爰へ投げて置たなら今に那の烏が來て喰つて仕舞うだろう」と往來へ二ツの握り飯を投り出しましたスルと惣右衛門の未だ立ち去らぬ間に一羽の烏が飛び下りて參り其握り飯を喙んで元の樹の上へ飛歸りました

側に見て居た惣右衛門は惣右「アヽ烏に反哺の孝ありと云ふが實に鳥類でさへ那の通りだシテ見れば人間と生れては充分に孝養を盡さずば相成るまい一刻も早く母上の御機嫌を伺ん」と之より道を急いで漸く其日の夕暮に赤穂なる

母の閑居へ着いたしました母は夕景の事故獨り佛檀に御灯を點じ亡君冷光院殿の御位牌を飾り付けて看經いたし居りますと惣右「お頼申します……お頼申します……」母上……」母親は不圖耳を澄して聞くと悴惣右衛門の聲だ母「ハテ今時分に何しに參つたか承れば江戸表下向も間近に相成つたと云ふに今此處へ參るとは一向合點の往かぬ事と立出でゝ見ると紛ふ方なき惣右衛門だ母「悴かい惣右「ハイ母上御機嫌克く入らせられますか母「何か急用でもあつて參つたのかエ惣右「別に急用と申す次第には御座いませんけれど先達も申上げました通り近々の内に江戸表へ下向いたしますに就て一寸御暇乞に伺いましたマア昇つて緩々御咄しいたしませう」と之れから足を洗ひ座敷へ通りますと母親は如何にも不興の顔色だ母「惣右衛門……デは態々此母の安否を尋ねん爲めに參つたのだな惣右「如何にも左樣に御座いますお一人で此淋しき片田舎に御住ひに相成りては如何にも氣懸りに御座います故お名殘を惜し

み旁御尋れを致しましたる次第に御座います母「爾うであつたか……」と云つた切り別に何とも申ませんとも云ふ者は此惣右衛門の母親と云ふものは非常に忠義な志の深い烈女で男であつたなら第一に復讐に加盟すべき人物であるけれども女の事ではあるし殊に老人の事故此上は切めて悴惣右衛門をして亡君御無念を次ぎ怨を晴さしたいと夫れば一心に思つて居た故既に義士復讐を企てたことなどは人より先きに存じて居つた程です夫れ故例へ此義士の盟約と云ふものは親兄弟たりとも喘してはならぬと誓言いたしながらも惣右衛門の母には既に悟られて内藏之助始め隱す譯には參らなくなつて居つた殊には氣象の勝れたる婦人の事であつて見ますればヨシ知つたにしたところで敢て夫れを人様に喘す様な人物では御座いませんから此點は一同の盟士も安心いたして居りました……斯様なる貞烈の老母であるのに惣右衛門は身を捨てゝ亡君の仇を復さんとする矢先きに當つて母の事を案じ一同江戸表下向と云ふのに己れ

一人立歸つて參るなどゝは詰り母のあるが爲めに後れを取る次第だ夫れでは冷光院殿に此母が申譯が無いと云ふので深く覺悟をいたし此夜惣右衛門には名殘の酒宴を開き更けて後各臥床に入りました處惣右衛門は晝のつかれで悉く能く寐て仕舞いました母「アヽ思へば悴が斯うして母の身を案じて立歸つて尋れて參られたるは嬉しき次第ではあるけれど亡君に對しては大に不忠の振舞となるのみか討入の場に莅んで如何なる後れを取らんも知れず寧そ自害して吾子惣右衛門を勵ますに若かず」と早くも決心いたしました故人々の寢鎮まりし時を覘ひソツと己れが臥床を立出で涙ながらに書置をしたゝめ氷の如き短刀を拔いて咽喉に差貫らぬき終に相果てたる翌朝に至り發見したる惣右衛門は斯くと見るより氣も轉倒いたさんばかり暫らく惘然として居りましたが側にあつたる一通の書遺を取り封目を解く間遲しと讀下すに

一筆申遺し候惣右衛門事常々孝行の志ざし深く朝夕優しくいたし呉

候段夢〳〵忽かには思侍らず併しながら此度の仕合せ又立戻る程の心懸けに母が事を思ひ給ふ程ならば吉良家へ討入の時偶と母のことを思出し進む勇氣も碎けて中々敵に内甲を見透され給はん事疑ひなし是母が在故と悟りし故今宵先立申候跡にて心懸り無く吉良とのは亡君の仇母の讐と思ひ定めて打入給ふものならば功名手柄も人に後れ申べしと之のみ悦び入申候何事も殊の外最後を急き候まゝ粗々申残し候（云々）

母より

惣右衛門殿へ

と書いてありました之れを見たる惣右衛門は惣右「アヽ之れは某が一生の不覺と申すもの母上があつたなら心を引れて後れを取らんとの御心配かアヽ忝ない勿體ない此上は思ふ存分なる働きをいたさんと厚く野邊の送りをいたしまして之れより再び京都へ取つて歸り一同と共に江戸表へ下向し討入の夜の如き

は非常の目覺しき働きをいたしました

忠魂義膽古今稀にある人

○第二十九席

一生に仇を討つ三度の堀部安兵衛

伺ひまするは堀部安兵衛武庸の傳記……安兵衛は淺野家を浪人いたし江戸表へ參りましたが心は無二の大忠臣で御座いまする、ナニシロ腕前が出來るから若しや敵上野介を討ち取る抔の事がありは仕まいかと云ふ懸念を敵に抱かせますからソコは安兵衛の事でありますが故表面は酒を飲んで亂酒と見せかけて居る……尤も此安兵衛と云ふ人は一生の間に三度仇討をいたしたと云ふ程の人物で御座いますが其内で有名なる高田の馬場で叔父なる菅野六郎右衛門の仇を其場を去らせず討取りましたが此れは未だ淺野家へ仕へません以前の事でありました……菅野六郎右衛門と云ふ方は頗る劍術に巧みで御座いまして當時江戸表でも六郎右衛門の上を越すと云ふ者は殆んど無いと云つても宜しい

程だ夫れ故八丁堀に道場を構へて居ると松平左京太夫殿が御懇望で御召抱へに相成りました處御家中には隨分意地の悪い奴が居りまして兎角新規召抱への者などをばイビリ出すと云ふ樣な事があ る至つて惡い風習で御座います

六郎右衛門も余り腕前が出來るので自然家中の者に嫉まれますやうな始末……

爲めに村上庄左衛門と口論をいたしました夫れが元で遂に高田の馬場に於て

果し合ひをいたすと云ふ事になりました六郎右衛門も敵に果し狀に附けられて

默つては居られませんに依り時日を期して參りましたがナニシロ腕前は出來る

し殊に卑怯なことをいたして命を全くせんよりは例令命を落しても侍らしく

討たれたいと云ふ覺悟故甥の安兵衛に置手紙をいたして參りました至れば既に

庄左衛門は弟庄介をはじめとし竹原一角眞部猛春其他劍術の出來る者

十三名を召連れて出張いたして居るナニシテも加勢が多いから自然勢が

烈しい 庄左「菅野氏大層遲いお出で御座るな、拙者などは先刻よりお待申し

て居つた定めし命が惜くて斯く遲參いたした次第で御座らうな」と先づ第一番

に恥しめました

之れを聞いたる菅野先生はニツコと笑ひ六郎「イヤ〳〵決して左樣な次第では

御座いませぬ別段御申越しの時刻には差ばぬ筈……と云ふ内にハヤ敵には充

分の支度が出來て居りまして相圖と共に一同刄を連れて切り付けました六郎

右衛門も必ず此位の事はあるだらうと存じたに依り羽織の下には悉く用意

をいたして居つたこと故其羽織を搔捨てゝイザ來い來れと立向ふ老人なれども

手練の六郎右衛門ゆゑ十數名を相手として右に當り左に追散らし奮迅の勢ひ

最初の中は誰一人寄せ付けぬ有樣で御座いました尤も敵方の首領庄左衛門と

云ふ奴は卑怯で御座いますから自分は一番後に退つで居りました外の者を指圖

いたして居るやうな譯……其内に追々時刻も經つに從ひて老年の悲しさ六郎

右衛門は次第に呼吸が急しく相成り從つて太刀筋も亂れて參る、見物人は周圍

に黒山を築いたやうであるが甲「ナイ〳〵可愛想だなア那の老爺さんはナカナカ腕前は強さうだが何うしても年を老つて居るばかりか寡は衆に敵せずだから仕方がない俺だつて腕前の出來る者なら充分助太刀をして遣るんだけれど情ない事には劍術も何も知らないから仕方がない乙「爾うよお前ばかりか俺だつて斬うして見て居るやうなものゝ何うも可愛さうだ……アレ見れい肩先をザツクリ遣られた……ソラ打倒れて仕舞つた」と見物人一同菅野六郎右衛門に同情を寄せて哀れに思はぬ者は御座いません庄左衛門は喧嘩の相手として果し合に迄及んだる六郎右衛門が最早手疵の爲め打倒れましたのを見て快地よげに打笑みトゞメを刺さんといたす處へ見物人を押分けて現はれ出でたる一人の侍がありました之れぞ即ち堀部安兵衛で御座います

安兵衛は叔父六郎右衛門が高田の馬場に於て決闘いたすなどの災難のあらうとは夢にも知らず八丁堀なる菅野の道場へ立歸ますと置手紙がしてある「安

兵衛殿へ……六郎右衛門と書いてある故何事ならんかと急ぎ封を切つて見ると

取急ぎ申殘し候扨家中の劍客村上庄左衛門と不和を構へ候ため先方より果し狀を付けられ唯今より高田の馬場に於て決闘仕り候亡き跡は一遍の念佛頼み入申候

と書いてありましたから大に驚き日頃の大刀赤鞘の名劍を帶し飛ぶが如くに馬場を差して參つたので御座います……至れば叔父六郎右衛門に既に事切れたる體故之れを見たる安兵衛は怒り心頭に發し大音を擧げたる事にて安兵「ヤア〳〵村上庄左衛門同く味方の奴原其處動くな某は菅野六郎右衛門の甥中山安兵衛なり（此當時は未だ堀部の養子になりませんから中山の姓を名乘つて居つたのであります）叔父の敵動くな去るな」庄左衛門は今や菅野の助太刀が顯れたので心中少しく恐れを抱いた殊には當時赤鞘と云つては誰一人知ら

ぬ者はなき劔術の名人だと云ふ事は存じて居る故孰れも尻込みいたすやうな次第安兵衛は進み來るものを眞向梨子割り袈裟切り車切り最早敵は庄左衛門兄弟と相成りました 安兵「サア之れから某が充分手料理いたし遣はすぞ……」と迹けんとする二人を引捉へ思ふ存分にして仇を復しました

此天晴なる腕前を見物いたし居つたのが堀部彌兵衛金丸と云ふ者の妻おくにと娘のおきくで御座いましたナニシロ安兵衛は繩だすきを懸けて參つたる事故之を見たるおくには くに「マア縁起でもない繩だすきなどして……」と云い樣娘のおきくを顧みると きく「全く爾うで御座いますれい」と云つて自分の締て居つたる緋鹿子のシゴキを取つて母に渡しますおくには人を押分け くに「那の若し孰れのお方樣か存じませんが繩だすきは延喜でも無い……之れは娘の 志 何うぞ之れをお懸けなすつて下さいまし」と渡します故 安兵「夫れは千萬辱く存じます……」と云ひながら夫れを結んでたすきといたし敵

の奴原に向ひましたがトウ〳〵敵を打つて仕舞ひました後に堀部彌兵衛金丸は如何にも安兵衛の 志 に感じ 彌兵「江戸表は廣しと云へど那 位 の人物は少ない 某 も斯して娘一人だから是非養子をいたさなくてはならぬが夫れに就ては何うか安兵衛如き人物が欲しい者だ」と彌兵衛頻りに次手を求めましたが宜い鹽梅に周旋する者があつて爰に堀部家の養子となり淺野家の家來となりました丁度死ぬ迄には三度有名の仇を討つたと云ふのは此安兵衛の事で御座いますが第一は父の仇第二には叔父菅野の敵第三は主君 内匠頭の仇を復したのですが實に義士の中でも武術に付ては有名なる人で御座まいする……

○第三十席

苦辛を嘗め盡せし遂に仇の邸に討入る

エヽ永々辨じましたる赤穂四十七士の傳記内匠頭が殿中刄傷の始末より義士銘々傳に移りましたが有名なる方々の 大略は申し上げました故之れより

愈々討入の始末から本懐成就の件を言上いたしませう……エヽ元禄十五年十二月十四日此日は亡君の御命日と云ひ殊には此場合を失して何日上野介を討取る時機の來るやら殊に上杉家へお引移りと聞いては猶更の事で御座います故愈々義士の面々評定も定り此日討入と云ふ事の相談も纏りました……デ此日は未明より致して大石内藏之助良雄一子主税良金を召連れ高輪泉岳寺に至り住職に面會して内藏「今日は亡君内匠頭の御命日で御座いますゝし殊には浪士の面々何時まで奉公仕官いたさんで居つても日々糊口に窮する斗り夫れ故漸く諸方に奔走して夫々仕官いたすことに定まつたれば最早之れ迄一家中に居つたものも再び逢ふのは何時の事やら相分らず夫れ故本日は亡君の御墓前にて送別の會合をいたす積り御住職にも何卒御回向の程を願ひたく存じますゝ住職「宜しう御座います……併し夫れ〳〵御奉公口もあり何より大慶に存じ升る……」と云つて之より四方山の咄

しをいたして内藏「夫れに拙者も各諸侯より高禄をもつて召抱へん抔申すものも御座れど今迄殿の御恩顧を戴いて居つて見れば主家滅亡の爲め再び奉公いたすと云ふも實は異なものである某丈は田舍へ引籠り悴主税に相應な口があつたら出世いたさせて遣りたい所存に御座います住職「夫れは〳〵田舍へ御引籠りとは能い御決心……嘸亡君にも忠義のお志を御感服で御座いませう」と互に咄しをいたして居る内豫て内談のありました事故四十餘人の者共は何れも泉岳寺へ集りました、ソコで住職より讀經回向が濟むとつゞいて内藏之助夫より順々に燒香を濟ませましたが内藏之助は白銀三十枚を取出し内藏「之れは輕少ながら御回向料として御受納下さるやうに……夫れから少々内談も御座れば一時の間客殿を拜借いたしたいが如何で御座らう住職「宜しう御座います……」夫れから一同の面々は客殿へ移り襖を建切つて今宵の内談に取かゝると内藏は手配りの申渡しを認めた

る書付を懐中より取出し一同の者に廻送して一覽いたさせまして
討入り手配り書號令の事
一、廿四人表門より進むべき事
一、廿三人は裏門より進むべき事
一、一組を三人と定め申すべき事
一、一組三人影身の如く進退して働くべき事
一、相言葉は豫て申渡したる通り山と云へば河と答へべき事
一、火の用心專一の事
一、首を揚げ候人一番高名と心得べき事
一、本懷を遂げし上燒香は一番高名のものをもつて第一となすべき事
一、内入の時は太鼓をもつて相圖いたすべき事

一、侍なりとも手向ひなきものは討取るまじき事
一、家中の妻子等猥りに討取るまじけれども手向ひいたさば必ず容赦いたすまじき事
一、御首を揚げ候はゞ笛を吹くべき事
一、本意を達し候後一同に切腹いたすべき事
右の條々堅く相守り違背あるまじき事
之れより内藏之助に於きましては呼子の笛と氣付の藥其の他金子四兩宛を渡しました此れは萬一討死でもいたすやうなことかあつたとき跡を引取つて貰うには詰り金子が入る……金子さへあれば誰か死體の取片付け位はいたして呉れるならんと云ふ積りで斯ういたしました夫れのみならず赤穂の浪人は愈々飢餓に迫つたものだから夫れで苦しまぎれに吉良邸へ討入り名を貪るやうなことをいたしたと云はれては如何にも殘念であると云ふ處へ氣が付いての事でありま

す……デ斯くの如く手順を定めましたから晝少し前に一同退散いたし之れまで夫々世話になつたところやら知己親戚へは余所ながら暇乞をいたし夫れより夜に入るや一同吉良の屋敷を指して進みました、先づ表門の方よりは大石内蔵之助良雄二十四人の同志を引連れて押寄せたがナカ〳〵要害堅固で御座います故裏門より進んだ廿三名の同勢と交代いたす事に相成つた……此日は朝來雪も降りましたが夜に至る頃には悉く晴れ止み一面の銀世界と相成りました、片岡源五右衛門は長梯子を懸け降積りたる雪をはらつて塀へ上り次いで磯貝十郎左衛門、大高源吾等躍入り門番に迫つて門の鍵を出させやうとするとナカ〳〵剛情な奴で出さないスルと其内一人は隙を窺ひ遁去らんといたします故大高源吾は之れを見るや拔打に斬り付たがアツとも言はず倒れて仕舞う、外二名の者はガタ〳〵震へ出した兩人「鍵は此處にありますから何うぞ御勘辨なすつて下さいまし命丈は御扶け下さいまし」と云つて鍵を

渡しました故決して生命を取らうと云ふ次第では御座いませんに依つて其儘猿轡を箭めて置き門を開たので二十四名の者は苦もなく門内へ這入る事が出來た夫れより表門の方に於ては裏門よりの注進を相待つて居りまするところハヤ押入し樣子で御座います其内に村松三太夫、木村岡右衛門が鍵をもつて門を開けましたから主税をはじめ二十三名は之より押入り玄關へと進み一同異口同音に ×「淺野 内匠頭の家臣亡君の鬱憤を晴さん爲め推參せり上野介殿尋常に勝負あれ」と呼わりましたる事故吉良邸に宿直の面々は、スパコソ淺野の浪士が押入りたり痩浪人の木葉侍何程の事やあらんと孰れも切尖を揃へて拒ぎ闘ふ……吉良家にもナカ〳〵忠義な侍がありまして主の爲めには死を惜まず戰ひましたのですが如何せん主人上野介が不義大慾な者で御座いますれば空しく犬死いしたるやうな次第と相成りました奥へ進んだる義士の面々に於きましては用意の軍用炬火……即ち之れは

蠟燭で御座いますが折釘の大きなものを用意してある故夫れを壁へさしまして、件の蠟燭を灯す夫れ故間毎〳〵は畳をあざむく如くに御座います其上ならず弦は切りはなし槍長刀の柄は中ばより切捨てゝ役に立たぬやうにいたすなど、悉く敵の爲めに利益となる事は先へ廻つて末漸に拒ぐ……孰れも之れは内藏之助の策略……然るに義士の面々は敵と視うは上野介一名であるに一向見當りませんから内藏之助は號令を下し一間に於て切腹の要意をいたしました尤も之れは計略の一ツで一同の者が切腹の聲色をつかつたのだ……

……ソシテ蠟燭の如きも悉く打消して靜まり返つて居つたれば今は鼠の走る音さへ分る位……スルと遥か彼方に當つてかすかに人聲が致します……氣早の武林唯七は猶豫いたさず疾風の如く物音人聲のいたせし方へと進みましたが其處は雜部屋で御座まして表から錠がおりて居る唯七「何うも不思議だ確かに此處に相違ないが表から錠が懸つて居ては中に人の居る可き筈もない

が」と暫し躊躇して居るところへ間重次郎次いで茅野和助、大高源吾など駈け付けましたが源吾は突如懸矢をもつて戸を破りますや唯七は暗闇の中へ飛込みましたところ果して内より二人の侍が切て出ました唯七「猪口才……

……と渡り合ひ難なく斬つて捨てましたがヨク〳〵見れば後向きになつて来だ誰か一人居るやうすで広い升間重次郎は猶豫もあらばこそ携へたる槍を追取りグサと横腹を目懸けて突立てたり其間に唯七は髻をつかんで引摺り出すと上には綾の小袖を着し下には白毛垢を着て居るのみか額には太刀疵もあります事故之れぞ敵と目指せし上野介に相違あるまじと呼子の笛を鳴らして一同をあつめました内藏之助は篤と之を見て禮を厚くし切腹あらんことを勸めますところ件の手負は飽までも上野介ではないと云つて剛情を張りナカ〳〵切腹いたすどころではない隙もあらば遁出さんと致しまするに依り此上はいたし方なしと兼て亡君御切腹の砌り恨を飲んで御生害になつたる短刀を

もつて首を馘落し上野介の死體をば見苦しからぬやうにいたして置き夫れから首を持つて猿轡を釋めて置いた門番に見せると確かに上野介に相違ないと云ふ之れにて一同千辛萬苦の心勞も茲に本懷を達することが出來て高輪泉岳寺へ引上ました

ソコで一方は泉岳寺へ引揚ると同時に此事を上へ訴出でんければなりません

に依り吉田忠左衛門、富森助右衛門の兩人は有りし顚末を仙石伯耆守へ訴へ出でました故伯耆守には早速登城いたされ將軍家へ言上いたしました處將軍家の鞏命によつて細川越中守殿、水野賢物殿、松平隱岐守殿、毛利甲斐守殿此四家へ一同の者をお預けと云ふことになりました

細川越中守殿へお預けになりましたのは都合十七名で

大石内藏之助良雄　片岡源五右衛門
吉田忠左衛門　間瀨久太夫

原惣右衛門　小野寺十内
赤垣源藏　早水藤左衛門
近松勘六　間喜兵衛
堀部彌兵衛　潮田又之丞
磯貝十郎左衛門　富森助右衛門
奥田孫太夫　大石瀨左衛門
吉田五郎右衛門

又水野監物殿へお預けになりましたのが九名

横川勘平　村松三太夫
神崎與五郎　間瀨孫九郎
茅野和助　三村次郎右衛門
矢頭右衛門七　奥田定右衛門

間重次郎
松平隱岐守殿へお預けになりましたのは十名
大石主税　不破數右衛門
堀部安兵衛　大高源吾
貝賀彌左衛門　岡野金右衛門
中村勘助　千馬三郎兵衛
木村岡右衛門　菅谷半之丞
毛利甲斐守殿へお預けになりましたのは同じく十名
武林唯七　間新六
岡島八十右衛門　小野寺幸右衛門
倉橋傳介　杉野十平次
前原伊助　吉田澤右衛門

村松喜兵衛　勝田新左衛門
四十七士の中寺坂吉右衛門は一同本懷を遂げし顚末を齎し亡君の奥方瑤泉院の許へお使として參りまして其より一同切腹ありし後世を吊ひましたからお預けの連名には加ばりません……デ城中に於ても夫々御評議に相成りましたが死を賜ばる事に御評議一決し元祿十六年二月四日一同切腹申付けられました
今猶殘る高輪泉岳寺香花の絶へることなく忠臣の鑑と仰がれますが畏くも明治元年十一月五日車駕東都に行幸の時詔を賜ばり大石義雄の墓へ金幣を給ばりました。茲に義士銘々傳の講演もこれで終りといたします……
……エー永々御退屈さま……

赤穂義士銘々傳（終）

明治四十四年七月八日印刷
明治四十四年七月十二日發行

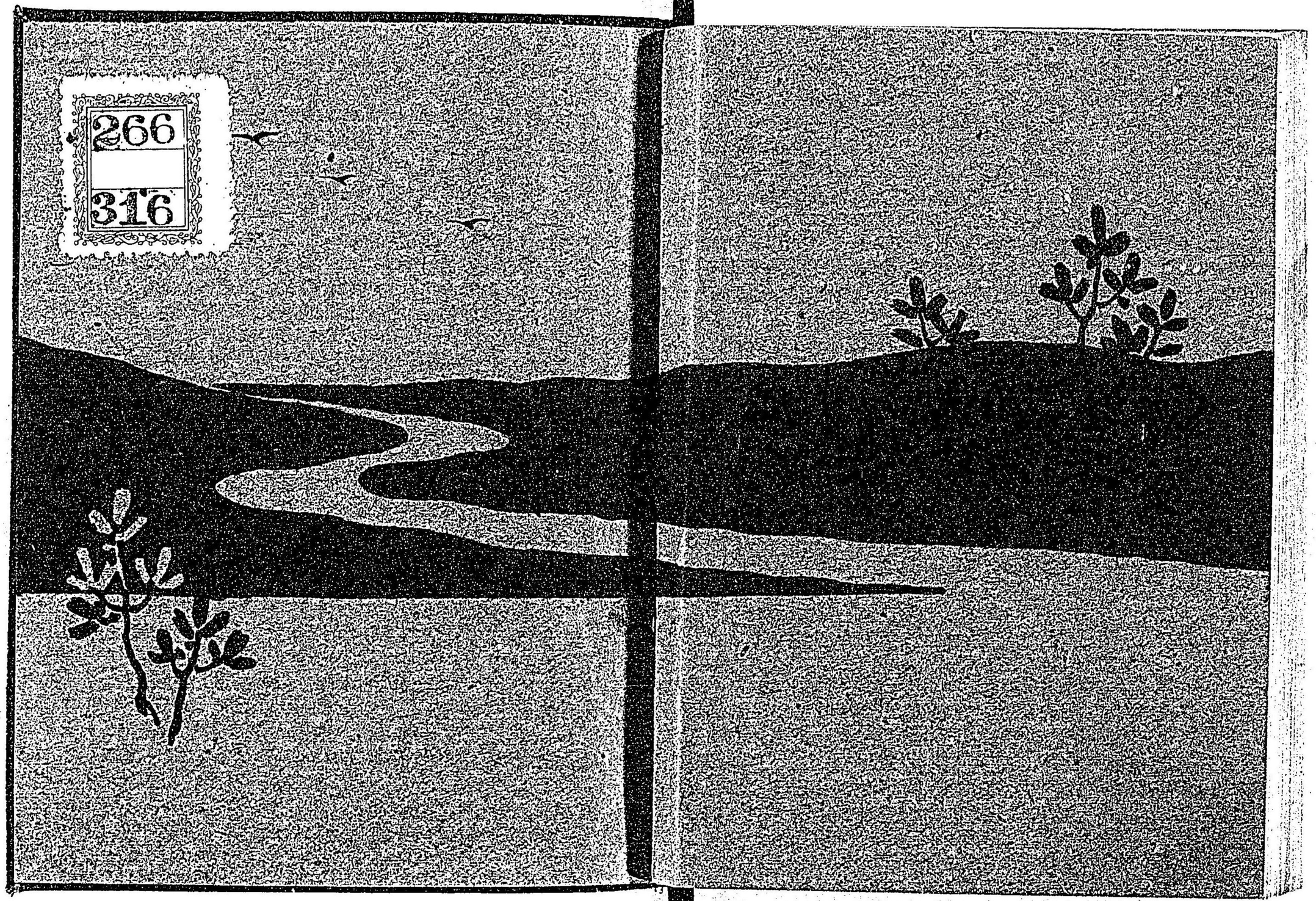
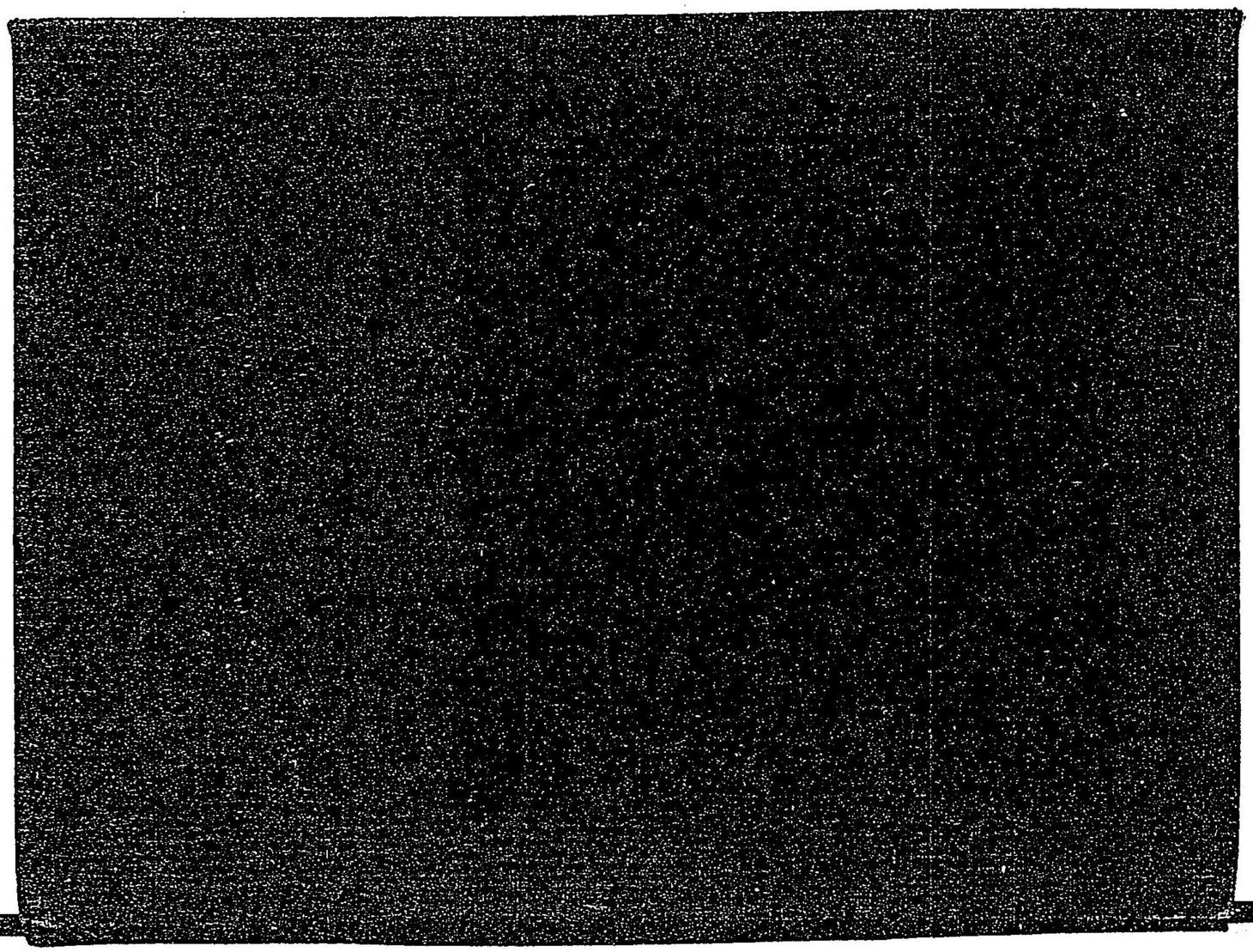
赤穂義士銘々傳

不許複製

著者　講談倶樂部
東京市淺草區旅籠町二丁目七番地
發行者　中村惣次郎
東京市京橋區弓町二十四番地
印刷者　金子久太郎
東京市京橋區弓町二十四番地
印刷所　三協印刷株式會社

發兌元
日吉堂
東京市淺草區旅籠町二丁目七番地

定價金貳拾五錢　郵税金四錢



266
316